
天上天下、竜娘独占注意報！

樹板 形似太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天上天下、竜娘独占注意報！

【Nコード】

N8872W

【作者名】

樹板 形似太

【あらすじ】

愚かな国々と名付けられた戦争が終わった世界……人間、末天人、半獣人、そして世界にたった独り残された竜人が織り成す物語。金欠独立軍に所属する一七歳にして中尉のメイト「ヴァルター」、ヴァミル帝国騎士団十番隊の若き隊長クラド「チビィ」。人の味方である独立軍、正義の味方である帝国騎士団、幾度となく衝突する二人。選ぶべきなのは人が正義か、大切なものを考えるシリアスファンタジー小説……に桁違いの戦闘能力を持つ竜娘が一人います。

キャラクター紹介（ネタバレ有）

メイトⅡヴァルター

タイプ／人間・剣闘士

階級／中尉

クールな一面、軍人らしくない直情的な行動も取る主人公格の少年。

コリーⅡロウ

タイプ／人間・二丁銃士

階級／曹長

メイトの世話役兼まともな軍人（非常に重要）である少女。

イオスⅡサビルーク

タイプ／人間・魔術士

階級／大尉

エリートを体現した様な冷静な軍人、だがおしゃべり。

ラバレルⅡソクラスⅡキルディアⅡラインⅡラハール

タイプ／竜人・？？？

階級／少将

分析不可、戦闘力不明。天真爛漫なお気楽少女であり、メイトの師匠。

ガレウスⅡリヨウ

タイプ／人間・？？？

階級／元帥

元帥さんです。

ジョーカーⅡエンハンス

タイプ／人間・魔槍士

階級／少尉

独特の雰囲気を持つ少女。主に槍で戦っているが、魔術も使えるらしい。

ランジリー＝ヴァルター

タイプ／半獣人・????

職業／山賊

メイトと同じファミリーネームをしているが、関係は不明。

プロローグ 戦後二百年の、木の下で

フォーリイ世界大戦……今から約二百年前に勃発した、五大国による世界的な戦争の事を指す。

五〇年に渡り続いた大戦は、建築学や造船技術、剣術・狙撃技能や魔術の反転作用等といった、実に有りとあらゆる知恵を向上、発達させていった。しかしその反面、五〇年という長き月日は人を、動物を、土地を着実に蝕んでいった……深刻な食料危機が訪れたのである。

魔術国家エンフェナ、月夜の国須乃、鋼鉄の聖地ガリーマル、水の都エナメント、そして学園都市プルトの代表者は誰が示し合わせる訳でもなく同時期に停戦を申し出、戦時一切の干渉をしなかった律の帝国ヴァミルに集結、直ちに終戦へと話は流れたのであった。

だが、終戦になっても大戦の爪痕は広く深く、とても一力国で独立し続ける余力はどの国にも無い。このまま衰退の一途を辿るのかと人々は絶望に喘いだ。

「六国間で手を取り合おうじゃないか」

三代目ヴァミル帝国皇帝ラダマスス「グリム」フルイツが提案したのである。

終戦直後、勝国の無い戦争でのその提案は簡単なものではなく、新たな波乱を生むかに思われたのだが、提案には五大国を納得させる続きがあつたのだ。

*

『ねえー、戦うのは好き?』

「別に好きじゃネエよ」

『ふーん、じゃあ何でーは剣をしているの?』

「好きだから」

『なら好きなんじゃない』

「剣」戦いつて訳じゃないだろ」

『変なの』

「変なのはお前の単純すぎる思考回路だ」

『ぶ〜。……あ、じゃあさもし、その……何だろ、愛? で合ってるよね。愛する人と戦うことになったら、戦う?』

「戦う必要があれば戦う」

『え、もう少し考えようよ、大好きな人なんだよ?』

「戦う必要があるのなら戦うだろ? 何言ってるんだか」

『……サイッテ』

ーペチヨ。

一本の、樹齢数百年は有るであろう大樹。幾重にも木と木が絡み合って立っているそれは、周囲の木とは比べ物にならない圧倒的な存在感を放っており、見る者全てに神々しさを感じさせる程に立派な佇まいをしている。

そんな木の下、枝葉の隙間から溢れる日の温もりを堪能しながら幸せそうに昼寝をしていた一七、八に見える少年が頬に突然の異物感を覚え、ゆっくりと体を起こした。少年の寝ぼけた脳はその異物感により一気に覚醒していく。頬を伝うドロツとした湿り気、木の下、最高の天気。一瞬で状況を把握した少年は一言、

「サイッテ」

と、呟いた。

プロローグ 戦後二百年の、木の下で（後書き）

アットノベルズで試し書き有り。

第一章 第一話 始まりの他愛無い

簡素、質素といった言葉を大言したような部屋。昼過ぎの刺すような日の光が差し込む、見渡す限りの緑々とした森を一望出来る大きな窓、白いシーツの敷かれたシングルベッドと収納用のクローゼットが一つずつ、奥へと続く磨りガラス製の戸が一つという、何か物足りない飾り気のない、見るものに寂しい印象を与える部屋である。その部屋の出入口である木製の扉が、鍵を開ける音も無く開かれた。現れたのは先程まで木の下で昼寝をしていた少年であり、荒々しく扉を足で閉めた少年は磨りガラスの戸に一直線に歩み寄る。

くそっ……酷い目にあつた、と少年は舌打ちをしつつ、歩みを止めずに着ていた無地のＴシャツをベッドに脱ぎ捨て、黒いジーンズ一丁でガラス戸を乱暴に押し開けた。

中は小さなバスタブとシャワー、座席タイプの水洗トイレに洗面器が一括りに設置されているユニットバス形式の個室。洗面器の前に立った少年は蛇口の栓を軽く捻る。キュツという小粋な音と共に少量の水がそこから吐き出され始める。少年はそれで手を濡らし、脇に置かれていた石鹸を手にとって泡立て、もう何も付いてはいない顔に塗りたくっていく。特に右頬は重点的に掻き毟る様に泡を染み込ませながら。

五分程、泡を水で洗い流し、また塗って洗い流すという作業を繰り返し続けた少年は、ようやく満足したのかしたのか壁に吊るしてあつた手拭いで顔をごしごしと擦り、ふと、正面の壁に付いている鏡を一瞥。

毛の細い、長くもなければ短いという訳でもない黒髪、顔の擦り過ぎで多少赤くなっているが、はつきりとした目鼻立ちの精悍な自身の顔が映し出されるも、つまんねえ顔、と小さな溜め息を吐き、少年は手拭いを取っ手のある元の位置に吊り、開いたままだったガラス戸を抜け、手で丁寧な戸を閉めた。

「ああ……疲れた。明日からまた仕事か」

たまの休みぐらいゆつくりと休みたかったな、と、大きな欠伸をしながら両手を上げて背を伸ばし、そのままベッドへと倒れ込んだ少年。余程精神的に疲れたのであろう、少年はピクリとも動かなくなり、少し経つと耳を澄まさないと聞こえない程度の寝息が、静かな部屋へと染み込んでいく。

数時間後、部屋の外が数え切れない程の人の声や物音でガヤガヤと賑わい始めたが、少年は慣れているのか全く起きる気配なく眠り続ける。

早朝。

窓から見えるのは薄紫色の夜と朝の境目。少年が眠り始めた時はまだ南の空高くにあった太陽も、今は見当たらない。

その様な朝早い時分、部屋に響く『コンコン』という控えめなノック音。だが、少年は起きない。自身の顔面を枕に埋めたまま相変わらずの静かな寝息を立て続けている。

しばらく規則正しいテンポでノックは続いていたが、三〇秒程度経ったあたりで不意に鳴り止む。諦めたのだろうか、部屋には再びノックを無視して熟睡している少年の口から漏れる「スー……」だけが音源の静寂に包まれる。

――しかし、来訪者はそれだけで諦めるほど甘くは無かった。

突然の衝撃音。木製の扉が外れても不思議ではない程に大きくしなる。過度な攻撃、とも言えるようなノックの音に当然、少年は寝続けられるはずもなく、

「ぶおわっ！ な、何だ！？」

敵襲か！？ と、少年がうつ伏せの状態から背中をしながら飛び起きた。のと同時に、支えの為に伸ばした手を踏み外してベッドから転げ落ちた。「ゴフツ」と短い呻き声。頭から落ちた少年はそのまま床に顔面を強打、暫し「ぐももも」と顔面を両手で押さえ

付けて悶絶。そんな痛々しい少年の声が聞こえたらしく、激しいノックの音は止まった。扉には鍵が掛かっていなかったらしく力チャリ、と乾いた音を立ててノブが回り、ゆっくりと開かれる。

部屋の中へ、綺麗に磨き上げられて光沢のある黒いブーツが踏み入る。

「お目覚めですか、メイト・ヴァルター中尉」

長く艶やかな金髪を両耳の後ろで二つに分けてゴムで縛るだけのシンプルなツインテール、若干まだ幼さが残っている顔立ちの少女が、うずくまる少年の前に立って呼び掛ける。普通ならば可愛らしい少女といった印象を持つ所だが、纏う服装がそれを許さない。

薄く紺の混ざる黒い軍服。上着にはポケットが至る所に備え付けられており、胸の位置には仰々しい何かの葉を模した金の刺繍に紅い林檎の様な物が描かれているエンブレムが入っている。ズボンにはこれといった特徴は無く、ゆったりとして動き易そうな作りをしているが、腰の両側には革製のホルスターが吊るされていて、それ等を着せられている感無しにビシッと着こなしている少女の様は可愛い印象ではなく、凛々しさがある。

「コ、コリー……曹長にもなって……もっと普通に起こせねえのか」
メイトと呼ばれた少年は右手で鼻を押さえながら立ち上がった。
少女と並ぶとメイトの方が頭一つ分高く、見上げる形でコリーはメイトに含みのある笑いをかける。

「普通にしましたよ、三四秒くらい。ですが起きる気配が無かったので」

嘘付け、とメイトは頭の中で悪態を附いたが口には出さないで、何気なく視線をコリーから窓へと移す。

窓から見える景色は、まだ夜なのか朝なのかはつきりと判断のし難いものであり、メイトはコリーの脇を抜け、クローゼットの戸を開いた。中は部屋の様子とは違い、ハンガーでコリーの物と似たタイプの軍服も掛けられていたり少年物の漫画や良く分からない物等、多種多様な物が詰め込まれている。その中から据え置き型の小さな

時計を取り出し、時刻を確認。長短針は午前四時ちょうどを示している。

「はぁ……？ まだこんな時間じゃねえか」

「惚けてるんですか？ 今日は月例総会ですよ」

月例総会という単語を聞いたメイトは「ああ」と、思い出したように手で自分の頭を軽く叩き、用の済んだ時計をベッドの上へと放り投げて、

「すまんすまん、忘れてた」

「もう少し、自分の立場を良く考えるべきですよ。私も階級が曹長になったのであまり世話を見切れません。大体――」

「あー、分かった分かった。とりあえず着替えるから廊下で待っていてくれ」

「全く」

これ以上は勘弁してくれ、といった様子で手を振るメイトを見て、呆れたように額を掌で押さえながらコリーは扉の方へ歩き、部屋から出て扉を閉めようとしたコリーの手を、メイトの「あ」という声が止める。

「どうかしましたか？」

「覗くなよ？」

「……撃ち殺しますよ」

ボタン、と大きな音を立てて扉が閉まる。災難続きの扉であった。俺の補佐なら、もっと気楽にして欲しいもんだ。

メイトは頬を掻きながら軍服の掛かったハンガーをクローゼットから取り出し、戸を閉める。そこで初めて自分が上半身裸のまま眠っていた事に気付き、寝ている間にベッドの上から床に落ちていたＴシャツを開いた方の手で拾い上げ、更にある事に気付く。

「あいつ、俺が半裸だったのに普通に接してたのか」

何ともまあ、と苦笑を浮かべながらベッドの上に軍服を置き、Ｔシャツを丁寧に畳んでベッドの脇に置く。閉めた戸をもう一度開け、中にある収納棚から黒一色の長袖のシャツを取り出し、それを着る。

昨日から履きっぱなしだったジーンズにも皺が出来ており、床に脱いでからTシャツと同様に慣れた手付きで丁寧に畳んでいく。

「遅いですよ、もうすぐ始まります」

「悪い悪い、じゃま、遅れないように行くか」

結局、色々と整理していたメイトが部屋から出たのはコリーを廊下で待たせてから十分ほど経ってからだった。メイトはコリーと同様の、しかしコリーのとは違い、上着のポケットは腰の位置に2つしか付いておらず体のラインに合わせてややキツめに作られている。ズボンも幅にあまり余裕の無い作りで右腰には刃渡り一メートル程の剣を収める鞘が据えられている。

「全く……少しは自身の階級に応じた行動を取って下さいよ」

「あゝ、もう良い。次からは気を付ける」

「いつもそう言ってますけど」

横幅5メートル以上はあるであろう廊下、それだけで建物の大きさは相当なものと計り知れる。廊下には二人と同じ軍服を着る者で溢れており、老若男女様々。皆一様にメイト達と同じ方向へ進む。中にはメイトの顔を見てヒソヒソと何かを話している二人よりも更に若い女性も居るが、メイトは全く気にしていない。

「ほら、まだこんなに人が居るじゃないか」

「尉官以上の人なんて居ませんよ」

「いや、ぜってーイオスとかはまだだぞ」

メイトは誰かを探す様にキョロキョロと首を振り、向こう側の廊下を見るも、探し人は見付からないようだ。

廊下はカーブを描いて続く。建物はその線に添って必然的に巨大な円筒型になっており、廊下は手すりで区切られているだけで、建物の中心は開放的な空洞となって各階に繋がっている螺旋階段が目立つ。当然、反対側の面にある廊下にも人は溢れていて、その数は千やそこ等では済まない。

「では、尉官以下は下層階なので。最上階へどうぞ」

「はいはい」

螺旋階段に差し掛かった時、コリーはメイトにそう告げて下へと向かい、メイトは手をひらひらと振りながら上へ。先程までメイト達の周りには人が群れていたが、上に向かうのはメイトだけのだ。

「ああ、ほんとうに」

その光景にうつすらと苦笑いを浮かべたメイトは多少焦るように一階、また一階と歩を進める。しかし、最上階まではもう何十階とある。

「歩くのが億劫になりますね」

「やっぱりお前もか」

背後から掛けられた声、それにメイトは振り返る事無く応える。

「ええ、生憎、私には問題児を起こす仕事がありますからね」

「言い訳お疲れさん、イオス」サビルーク大尉？」

茶化す様に言うメイトに、「心外ですね」と乾いた笑い声を上げながら隣に並んだのは、型口まである真っ直ぐな青い髪に赤い瞳という、髪と目の色が違うという変わった男。イオスと呼ばれた男はメイトと大した歳の差は無いだろうが、落ち着いた口調と物腰が彼を大人らしく見せる。軍服はメイトやコリーのよりかなりゆったりとした作りでありロングコートの様に足元まで続いている、その裾からチラチラとズボンが見えるものの、それもかなり余幅がある。背丈はメイトとほとんど変わらない、一七〇中盤。

「にしても熱いな……」

「ええ、もう少ししたら夏が来ますからね。空調設備が恋しい」

階段を上るメイトとイオスの足が徐々に重くなっていくが、止まる訳にもいかないので歩き続ける。メイトの額に一筋の汗が流れたのを見たイオスは軍服から取り出したハンカチを差し出したが、メイトはそれを手で制す。

「せっかく良いの付いてんのに、金欠じゃあしやーねえわな」

「今年度の求人を見送るらしいですよ。一五〇年前、独立軍発足際は舞うように依頼が来ていたことも、今は落ち目。少ない依頼の中でも来るのは国家が手を出さないような難易度の高いものか低いものばかり、下手な人選は出来ないときたまんです。辛い時期ですね」

多少芝居掛かった大袈裟な身振りでそう言うイオス。だが話自体は決して大袈裟なものでは無いらしく、メイトも「はあ」と溜息を吐くだけ。

「もう減給でも良いから職場の設備をだな……」

「ははは、気にしなくても今年から減給ですよ。職場の設備は変わらないですけど」

転職するべきか？ と、冗談っぽく笑うメイトに、軽く突っ込みを入れてイオスは足を止めた。

「ふう、貴方と話していたらこの階段も早くて助かりますねえ」

「こつちもだ」

二人は足を止め、前を向く。

階段の終わり、横幅一〇メートルはあるであろう赤い絨毯の敷かれている通路の先にあるのは、先程からの二人の話では想像もできないような……一目で高級材木と分かる威風堂々とした大きな扉が聳え立つ。

二人は話すのを止め、静かにそこを歩き扉の前へ。メイトは片手を扉に当て、軽くそこを押すと力に全く逆らう事無く、むしろ二人を歓迎する様に開いた。

「ほとんど揃っているようだな」

「ほとんど、というよりは私達が最後の様ですね」

薄暗い、大ホールのような造りの部屋。二人の先には緩やかな半円状の床に椅子が何百脚と並べられており、そこには既に軍服を纏った者達が着席していた。その前方は筒状に上下に向かう空間があり、遥か下まで続くその先には何百何千といった豆粒のように見える軍人が立っているのが分かる。少し上にいくと狭い突起のような

場所があり、二人がくぐった扉と同様の高級そうな木で作られた演説台と、少数の椅子が並べられている。

「では、私はこちらなので」

「ああ、またな」

小さな、二人の間でしか聞こえない程度の小さな声で別れを告げたイオスは右へ、メイトは左へと向かう。

椅子は余裕を持って並べられており、メイトの足が誰かにぶつかったりするような事は無い。列の最前列にたった一つだけポツンと空いた空席、メイトはそこに座った。

コリーは……うん、分かん。メイトは少しだけ身を乗り出して下の階にいるはずのコリーの姿を探すが、何分人が多い為に誰が誰だか分からない。

多少の騒めきのあった空間は時間が経つに連れて静寂に包まれていく。いよいよとなつて、完全な沈黙と化した空間に『キイイイ……』という扉の開く音が鳴り響く。メイト達の座る階の上階からである。

同時に、数十名の物と思われる靴音がホールにいる全員の耳に届いた。

メイト達とは違う紅蓮色の軍服を身に纏い現れたのは、足音通り三一名の人間……いや、純粋な人間ばかりではない。

耳に動物の様な毛並を持ち、臀部から尻尾の垂れている者。通常の物より長く尖った耳を持つ者や。

それはメイトの周りも同じであり、歳こそはバラバラなものの普通の人間の中に上記のような人間も大量に混ざっている。

現れたその三〇人は各々予め定められているのか、すぐさま席に着き、黄土色の長髪を後ろ首の位置で縛っている四〇代中盤程の、多少顔に皺の刻まれている男が一人、演説台の前に立った。だが、その男よりも一番後ろの左端の席に座った、黄褐色の翼を持つ少女が目立つ。

一四、五に見えるが此処は軍……何故年端のいかない少女がいる

のだろうか。彼女はボサボサに乱れた長い白髪、金の瞳もしており、その瞳を心の底から眠そうに微睡ませ、退屈そうに欠伸をしており、辛うじて眠っていない様な状態だ。彼女の臀部から生える、爬虫類の物に似た太ましい尻尾は椅子の裏でぶらぶらと力無く揺れている。

『只今から私、ガレウス・リヨウ元帥の元、第一四六二回ヴァーメイルフールツ独立軍月例総会を執り行う』

演説台に置かれたマイクから、目立たない様にホールに取り付けられている複数のスピーカーにより拡声された声がホール中に響き渡る。今まで座っていたメイト達、そして翼を持つ少女の周りの者達は一斉に立ち上がり、ガレウスの真後ろの壁に貼り付けられているエンブレムと同じ大きな旗に向かい敬礼を行う。下のホールに居る者達も同様に、位置的には死角で見えないはずだが声の方向に敬礼。

『いい、楽にしてくれて構わない』

声と揃えてメイト達は再び席に着く。意外にもメイトは面倒そうにする事無く、ガレウスに敬意を持った眼差しを向けて規則正しくそれを行っていた。イオスは何の感情も抱かずに作業としてそれを行っている様子、下の階で多くの人数の中心辺りに立っていたコリアは何を考えているのか分からなく、少女は……最前提の行為そのものを行ってはいない。

『今回の案件は、昨今の資金不足、それによる減給及び求人の見合わせに付いてだ』

……さつきイオスから聞いたな。

いくらガレウスに敬意があると言っても、話自体には興味がないらしく話が始まるや否や、メイトは瞼を閉じる。いつも通り、耳を澄ませても聞こえるか怪しい程の小さな寝息を立て始めるのには大した時間を要さなかった。

第一章 第二話 メイトの憂鬱

「……ルター中……ヴァル……中尉さん」

「ん……？　くあ……」

……誰だ？　眠りこけていたメイトの耳に聞き覚えの無い透き通るような声が届く。ぼやける視界を正す為に目を擦ったメイトの目に映ったのは、腰まである色素の薄い青い髪と若干たれ目がちな全てを見通しているかのような深みのある赤い瞳の、イオスと同じく髪と瞳の色素が正反対という珍しい組合せの少女だった。

顔を見ても誰だか思い出せない様子のメイト。それを察したのか少女は薄く唇を開き、周りに聞こえない程度の声で、

「初めまして、ジョーカー」エンハンス少尉です。そろそろ総会も終わりそうですよ」

「あ……ああ、サンキュ。俺は」

「一七歳にして中尉、剣士のメイト」ヴァルターさん。有名ですの知らない人は居ませんよ」

「それは褒め言葉的な有名なのか？」

ニヤッと含み笑いを言うメイトに、「どうでしょうか」とクスクスと笑いながら言うジョーカー。

「そつちも俺と変わらない歳だろ？　一階級差くらいで敬語は気持ち悪い」

「そうですか？　でも、これは癖なんです」

「さいか。イオスと似て珍しい髪と瞳の組み合わせだな。出身国は？」

聞いてから——ああ、初対面で聞く事じゃねえか。と考え、訂正しようと口を開いたメイト。しかし、僅かにジョーカーの方が早かった。

「……孤児です」

孤児、と聞いたメイトは「……あ、ああ」とバツが悪そうな顔を

して頬を掻く。会話が途切れた、奇妙な沈黙。だが、そこにメイトにとって救いの声。

『今月、七月の総会は以上だ』

ガレウスが総会の終わりを告げる。

同時に座っていたメイト達は立ち上がり、敬礼。ガレウスとその周りの人間は入ってきた脇の扉を開け、その姿を消していった。最後尾、遠目からも分かる程の眠そうな表情を浮かべている少女がその扉をくぐるまでメイト達は敬礼を解かなかった。

ざわめき始めるホール、敬礼を解いた者達は大きな扉を開き、外へ流れていく。

「ふう、起こしてくれて助かつ……た？」

メイトはジョーカーにお礼を言おうとして左に向いたが、既にジョーカーの姿は無い。もう帰っちゃったか、と考えたメイトは椅子に座り、首と肩をコキコキと回しながら扉の前の混雑が無くなるのを待つ。

「終わりましたね」

メイトの隣、先程までジョーカーの座っていた席にイオスが爽やかな笑みを浮かべながら座った。

「お前んお嬢さん、馬鹿みたいに首カクカクしてたじゃねえか」

「ははは、本当に寝てしまった貴方よりはマシかと思えますよ」

「見てたのか？」

「いえ、口元にヨダレの伝った跡が」

それを聞いたメイトは小さく舌打ちをしながらゴシゴシと口元を軍服の袖で拭う。イオスは乾いた笑いを上げて扉の方へ顔を向ける。

「そろそろ良さそうですね、帰りますか」

「ん、そうだな……よつと」

メイトはイオスの意見に同意し、立ち上がって背を伸ばしてから先に歩き始めたイオスの後ろをとると追う。

「今日はこの後、何かご予定は？」

「んー……今何時だ？」

メイトの問い掛けにイオスは歩きながら袖を捲り上げ、腕に巻き付けていた腕時計の盤上を見る。

「丁度朝の五時になったばかりですね」

「昨日何も食ってねえんだ。腹が減って寝付けないし、朝食まで何かするかな」

「ふむ、それならば私の部屋でオセロツ——」

堅いものと硬い物が勢いよくぶつかるような音がイオスの言葉を遮る。

顔に文字通りハテナを浮かべるイオス……それもそのはずで、メイトに何事かと聞こうとして隣を向いたものの、そこに彼の姿が無かったからである。

代わりに居たのは、爬虫類の……違う、翼の節毎に付いている立派な翼爪、それにそんな軟な物ではないがっしりとした……そう、まるで伝説上の生物とされる竜の翼を背から生やしている少女。それが太さ回り三〇センチ程の立派な尻尾をブンブンと振り回し、「ぶひゃひゃひゃひゃ」と爆笑していたのだ。

「ラバレルⅡソクラスⅡキルディアⅡラインⅡラハール少将けーんざーん！」

「ラ……ラソキララ少将？　ここにメイトさんが居ませんでしたか？」

「あれ、あれ。ひひひ」

歳相応の無邪気な笑い声を上げ、目の前やや下あたりを指差して腹を抱えている。イオスはその指の先、二人の向かっていた階下へと視線を流す。

「メイトⅡヴァルター、味方の中でも油断するなと常々教えているじゃろう」

緩やかなカーブを描いて下に続く螺旋階段、ちょうどホールの一個下に位置する踊り場でメイトは伸びていた。

「メ、メイトさん？」

イオスの呼び掛けに全く反応を示さないメイト。

血こそは出ていないものの、一〇段以上の高さから堕ちた衝撃は想像するに易く、指先一つ微動だにしない様からどうやら気を失っているらしい。ラソキララと呼ばれた少女は段上から飛び、翼を軽く羽ばたかせてメイトの前に舞い降りた。「ほれほれ」と言いながら無抵抗のメイトの頬をつつく。

刹那、『ヒュッ』という音、建物内にある照明を反射する何か、ラソキララの人差し指に止まる剣の刃。

「軍則第二条、味方に対する抜剣、発砲、攻撃魔法詠唱の禁止。儼じゃなければ首が刎ねられているところじゃ」

歳に似合わない言葉遣い、そしてメイトの放った剣を指一本で止めている彼女の姿は正に異様、指先からは一滴たりとも血が垂れていない。メイトは起き上がりざまに剣を抜き、的確に首を狙い斬りかかるといった一連の流れるような危険極まりない動きをみせたが、ラソキララに防がれた瞬間、糸が切れたかのようにその場へ倒れ込んだ。

「ん、何か死んだっぽい？」

「いや、流石に死んではないでしょうが、まあ部屋に運んで横にさせた方が良くと思いますよ」

ラソキララは振り返って冗談っぽく尋ねるが、段上で突っ立ったままで既に冷静を取り戻したイオスはいつも通りの調子で流暢に話す。つまらなそうにボサボサの頭を掻き耷るラソキララは、「やれやれ」と首を振ってメイトの肩に手を置く。

「仕方ないなあ、ほい、ワープ」

——うるせえ……。

メイトは背中に感じる軟らかい感触と、聞き覚えのある話し声で目を覚ました。

「つまり、防御魔法というのは本来攻撃性の魔法を空間上で制止させて圧迫固定することで盾と化す事を言うのですね」

「ええ、防御魔法はここ最近確立されたばかりの高度な魔法でして、極める事は難しいとされていますがね」

瞼を開いたメイトの視界にはアクリル製の天井が飛び込む。

——どこだ、此処。上体を起こしたメイトは、同時に鈍い痛みが頭を走り抜けたので顔を歪ませる。

「おや、起きましたかメイトさん」

「お邪魔しています、メイト中尉」

メイトの予想通り、話していたのはイオスとコリーであり、ここは見渡してみると此処は自分の部屋だという事に気付いた。

「あれ……何で寝てんだ俺」

寝ていたベッドの縁に足を投げ出したメイトは手で頭を押さえながら、何処から持ってきたのか、木製の丸椅子に座っているイオスとコリーに尋ねた。

「まあ、知らない方が良いですよ。はい、無理言って持つてきました」

二人の間には小さな机。その上にはトレイがあり、握り拳程の大きさの丸いパン、一口大の小さなチーズにウインナーが三本乗っている皿が置かれていた。

「これ、別売りの物を買ってきました」

コリーは脇の位置のポケットから一個の紙パックを取り出し、それをトレイに置いた。『健康一番！ 朝の野菜？選』と銘打ちされている。

「おおサンキュー、やっぱ朝はこれだよなあ」

「もう一〇時ですが」

コリーに礼を言ったメイトは朝食を前にし、疑問なんてすっかり忘れた様子で机をベッドまで引き寄せて食べ始めた。嬉しそうな表情で紙パックの口を開け、一気にゴクゴクと飲む。

「ああ、食べながらで聞いてください。久しぶりに私と任務に行きませんか？」

「イオスと？」

「ええ、コリーさんも一緒にどうです？」

「良いんですか!？」

「ええ、銃士が居ると何かと助かりますしね」

「行きます! 無理してでも行きます!」

コリーは無表情に近かった顔を一気にパアツと輝かせてイオスに向かい、ぶんぶんと首を頷かせる。

「お前、イオスと俺との態度違うくないか？」

メイトは食べる手を止めずにコリーに言った。コリーはメイトの顔を見て一言、

「イオス大尉は尊敬出来る所がたくさん有りますので」

「俺には無いって事かよ」

コリーの返答を聞いたメイトは顔を顰めさせ、イオスは複雑そうな表情で二人を見ながら笑う。

「良いぞ、俺も行く」

「はは、それは楽しみです」

反抗する子供のような眼差しでイオスを睨みつけたメイトは食事の手を早め、コ一杯もごもごと動かす。

「汚いです」

それを見たコリーが目を顰めた。

「すみません、依頼の受注をしたいのですが」

独立軍基地、その一階の一角に位置している《依頼案内所》という看板の掲げられている、十番受付まである広いカウンターに三人は居た。

「はい、了解致しました。この用紙にエントリーする人の名前と階級を記入して下さい」

「ありがとうございます」

受付の白い大きな獣の耳が女性から一枚の用紙と鉛筆を手渡されたイオスは、爽やかに礼の言葉を述べてから紙にスラスラと鉛筆を

走らせていく。

「ええっと……リーダーは誰がしますか？」

イオスⅡサビルーク大尉（人間）、メイトⅡヴァルター中尉（人間）、コリーⅡロウ曹長（人間）と書いた所で手を止めたイオスは背後に立つ二人へ問い掛けた。人間という表記の横には半獣人、未天人という文字がある。受付の女性の様な獣の耳を持つ人の事を半獣人というのだろうか。そうだとしたら耳が長く尖っている者は未天人となるのであろう。

「階級的にイオスで良いんじゃないか？」

「私もそう思います」

手持無沙汰、といった様に何もすることのないメイトとコリーは暇そうな顔でそう答える。

「了解しました、討伐で難易度はC辺りで良いですね」

「ああ」「はい」

答えを予想していたらしく、二人が答えるのとはほぼ同時にイオスは再び鉛筆をスラスラと走らせていった。討伐・採取・特殊と書かれている欄には討伐に丸を付け、難易度と書かれたS・A・B・C・D・Eのローマ字の内Cに丸を付け、

「記入終わりました」

と言つて、受付の女性に用紙と鉛筆を手渡した。受け取った女性は記入漏れがないか素早く確認した後、「では少々お待ちください」と奥へと消えていった。窓口の一つ一つは狭く造られており、中に何があり、誰が何をしているのかはあまり見えない。

特に話すことも無いのか、三人はぼんやりと辺りを見渡す。

結構な人混み。一階には依頼受付所の他に、一般受付、訓練表掲示板といったものから多数のベンチが設置されていて、それらを利用しているのは軍服を纏う者が大半を占めているものの、ちらほらと私服の者も見受けられる。

「メイトⅡヴァルター中尉、少し良いですか？」

いつの間にか受付に戻っていた白耳の女性がメイトに向かって言

う。不意に声を掛けられたメイトは「へ？」と裏返った間抜けな声をあげてそれに応えてしまい、隣に立っていたコリーとイオスがツブ、と小さく吹き出した。

「……何だ？」

わざとらしく咳払いをして誤魔化したメイトは、受付の女性、カウンターの前に気怠そうに歩み寄った。

「貴方を指名している依頼があります。詳細はこの用紙に」

「俺を指名？」

怪訝そうな表情を浮かべ、受付の女性から一枚の用紙を受け取ったメイト。

——俺を指名って、わざわざ中尉を指名なんて聞いた事ねえぞ。

大体、俺のこれまでの成績もそこまでの物は……。

そんな事を考えながら、用紙の内容を確認する。そして、彼は表情を凍らせた。

「……どうかなされましたか？ メイトさん」

数十秒、用紙に目を向けたまま固まっているメイト、どうしたのだろうかと、イオスが声を掛けるとようやく「あ……ああ」と曖昧な返答を返し、

「すまん、任務はこれで良いか？」

「ええ、私は良いですよ、何の依頼ですか？」

「私も、無理な難易度で無ければ構いません」

メイトの言葉に二人は特に反対する様子なく、メイトの次の言葉を待つ。

上手く言葉に出来ない、というよりは言葉にしたいくないといった様子のしかめっ面を浮かべたが、短く息を吐き、「難易度B、須乃とエナメントの国境の山賊退治」と一息に言った。

「もしや、ユーシア村ですか？」

「ああ」

イオスは何か知っている表情でそう言い、肯定が返ってきたのと同時に「ふむ」と何かを考えるように言い、唇に右の人差し指を当

てた。コリーには全く心当たりがないらしく、二人の様子を不思議そうに見つめるものの、何となく聞かない方がいいと考えて黙り込む。

「えー、この依頼には組点四四点が設定されていますが、このままのメンバーで宜しいですか？」

「組点？」

メイトは聞きなれない単語に首を傾げる。

「今日の総会で説明がありましたよ、新規則です」

「寝てたから分かん」

堂々と居眠りを告白するメイトにコリーはため息を吐きながら言葉が続ける。

「簡単に説明します。これは依頼の受注に対する人数制限をかける規則です」

「はあ？ 何のために」

「特定の依頼への集中を防ぐのと、個人個人への報酬額の公平化が目的です。二等兵一点・一等兵二点という風に吹いていき、この場合、私は曹長なので七点、メイト中尉は二点、イオス大尉は一五点なので合計三四点。残り一〇点分の人を連れて行けます」

「ちなみに伍長は五点、少尉は一〇点です。ランクBは兵長以下の参加は認められませんので、伍長二人か少尉一人が参加出来ますね」
「へえ……」

コリーの説明とイオスの補足を聞いたメイトはどうするか考える。そして、人数は多い方が良いか、と思い、

「誰か誘うか」

と言った、その時。

「ぶわぁっはっはっはぁぁぁぁぁー!!」

真上からの高笑い。場所は独立軍基地、円柱型に造られた建物は中心部が空洞になっている為、高笑いを聞いた人々は真っ先に空洞を突き抜ける形で最上階である三十階まで伸びる螺旋階段へと目を向けるが、それらしき人物は居ない。

次の瞬間、メイト達の少し後ろの位置で重々しいズンツという音と突風が吹き荒れた。

「話は聞かせて貰ったぞ！」

その突風の中心に居た……いや、舞い降りたのは自身の身長のはある巨大な竜の翼を目一杯に広げ、背を反らせて無い胸を張る少女、ラソキララである。その姿を見た瞬間、コリーは背筋を伸ばして敬礼をする。コリーだけではなく周りに居た者はメイトとイオスを抜いて全員敬礼をしている。そのまま五秒ほど硬直、そして自身のしていた行動に戻っていく。ラソキララはそれに対して特に何の意識もせず、すたすたとイオスの前に歩み寄った。

「何処かに遊びに行くのじゃろう、儂も供しよう」

「お前は何を聞いていたんだ」

「少将は三十点ですので無理ですよ」

冷静に突っ込みをするメイト、冷静な突っ込みをするイオス。ラソキララは納得できない、という風に頬膨らませて二人に抗議する。「良いではないか、あんなガキの決めたルールなんて儂は守る気はないぞ」

「いや、少将なら守れよ……。というか、久しぶりだな竜娘」

十四歳程度の少女が誰かの事をガキ、という光景はとても変な感じがするものの誰もそれには突っ込みもうとしない。どうやら知り合い……それも結構仲が良いらしい様に見えるメイトは彼女をなだめる様に頭の上にポンポンと手を置いて挨拶をした。朝会ったばかりなのだが、気絶したメイトは覚えていないのだ。

「む？ 先程会ったばかりじゃないか」

当然、話の食い違いの張本人でもあるラソキララはそう言う。二人の頭の上に？ が浮かび上がる。そして二人はそれぞれ違う答えに辿り着く。

—— ああ、総会の時上から見てたのか、とメイト。

—— ああ、こいつ馬鹿なのか、とラソキララ。

「それより少将、確か今朝、他の依頼が入っているといっってません

でしたか？」

これ以上二人が話を続けると面倒なことになる、と考えたイオスはメイトとラソキララの間に割って入りながら言った。

「そんなのは破棄すれば良い」

「駄目です、そんな私事は許されませんよ」

「儼なら大丈夫じゃ、なんたつて竜人だからな！」

口調が定まっていないう彼女はそう言つて胸を張る。どうやら、種族は竜人という種族らしい。今は折りたたまれている背の翼もやはり竜の物なのだろう。そんな彼女の頭頂へ、手刀が叩き込まれる。メイトの手である。

「駄々を捏ねるな、大体今回はお前には来て欲しくない」
「なっ」

来て欲しくない、その言葉を聞いた瞬間、ラソキララの動きが固まった。あからさまに落ち込んでいる様子だ。

「はあ……、土産は買うから安心しろ、食いしん坊さんめ」

メイトは言いながら、下を向く頭へと手を置く。

「師匠に向かって子ども扱いするでない！」

「ぐおっ！！」

腹部を貫通しようとする衝撃、それを腹部に感じたメイトは蹲り、空気を吸おうと必死に口をパクパクとする。ほぼゼロ距離からのボディブロー、威力が乗るはずのないその攻撃。だがメイトは冗談抜きといった様子でピクピクと体を震わせて床に這いつくばっているのが現実。

ラソキララはそのメイトの様子を一瞥すると、舌をベーツと出して翼を広げ、何処かへ飛んで行ってしまった。

「今のは少尉が悪いです」

「カツ……ッグ……、は、はあ？」

ラソキララが居る間ずっと敬礼をしていたコリーは、ようやくそれを解いて足元に這いつくばる彼に冷たく言い放った。メイトは呼吸がうまく出来ないのか、上手く話せていない。

「でも、あと一人誰か居ませんかねえ」

まるでいつもの事といった様子でその光景を見ていたイオスは最初に書いたエントリー用紙に似た紙へ、やはり最初の内容とほぼ同様の事を書いていた。ただし今回は討伐・B・指定依頼と用紙の上に記入されている。

「あら、そこで蠢いているのは……」

三人の耳を、メイトだけに聞き覚えのある透き通る様な少女の聲が走り抜けた。

第一章 第三話 鞘走る殺意（前書き）

第一章 第三話 鞘走る殺意

迫り来る焦げ茶色の肉球と鋭利な爪。

メイトはそれを剣の峰で受け止め、微妙に剣身を体の外側へとズラす事で威力を殺して受け流す。すかさず体勢を崩した熊の様な二足歩行の獣の脇腹へと左拳を覆い被せる形で叩き込んで更に崩し、とどめに左の蹴り。耐え切れずに熊は地面へ倒れ込む。

「メイト中尉、後に下がってください」

誰にも届かずに消え入りそうな小さな声、しかし戦闘に精神を集中させていたメイトの聴覚は通常以上に鋭敏になっており、言葉に従ってバックステップ。間髪入れずに、熊の頭へと黒い槍が突き刺さる。槍の形状は柄と刃の差が何もない、爪楊枝の様な形をしている。頭蓋を軽々と貫通し、大量に吹き出す赤い鮮血、それは地面、槍、そして槍に跨る様に乗っている少女にも例外なく降り注ぐ。黒の、メイトと同じタイプの体のラインを浮き出している近接に適したタイプの軍服に、胸の位置が僅かに盛り上がっている青髪紅眼の少女、ジョーカーである。腕力では乏しいであろう彼女でも全体重を掛けたこの一撃は頭蓋程度を割るには十分過ぎる威力があるのだ。少し離れた位置でも戦闘は起きており、コリーとイオスを囲むように数十匹の狼の様な獣が牙を剥いていた。メイトとズボンが血塗れのジョーカーはそちらへ走るが、間に合わない。狼が二人よりも早く一斉にコリーとイオスに走り出した。

コリーは迷わずに前方の狼を二丁拳銃で撃つていく。一匹、二匹、三匹と頭、首、そして顔面に鉛の球を受けて地に力無く落ち、血を吹き出す。しかし狙いは徐々に荒く、足、胴体等に当たり殺し切れていないのが半数以上である。もちろんコリーが撃っているのは完全に視界で把握できている前方の敵のみ、仲間のいる今、下手に後方に撃つことは出来ない。背後から二人に向かって飛び掛かる狼の群れ。

「我が眷属たる灼熱の炎、辺りを払う火の粉となれ……、風圧縮、挟重力固定！ 炎渦広盾」
ファイアーヒール

幾何学な、アルファベットにも似た文字で綴られている赤い紅い円形の魔方陣がイオスの足元に出現する。目を瞑って精神を集中させて詠唱アリアを唱え終わったのと一拍遅れ、イオスとコリーの背後に現れたのは一〇メートル四方の炎の壁。しかし迫力とは別に、厚さは僅か五センチ程しかなくダッシュとジャンプの勢いがある狼共を止められるものとは思えない。狼は飛び上がったままそこへ突っ込み弾き返された。狼が炎に怯えたわけでも、コリーが銃で撃った訳でも——コリーは炎の壁に驚いて振り向いて目を輝かせている——ない、純粹に鉄の壁に当たる様に、しかも炎に身を焼かれながらで弾かれた。しかし、殺傷性はなく、足を止められるほどのダメージも与えてはいないだろう。

「ジョーカー！ 左だ！」

「了解です」

壁に弾き飛ばされた一〇匹以上の狼の背や腹を、メイトとジョーカーが斬り付けてその命を奪う。見事で鮮やかな訓練された物と思える連携、戦闘が始まってからの獣、いや魔物達の断末魔の数は数え切れたものではなく、運良く生き残った獣達は文字通り尻尾を振って逃げて行った。

「すまん、無理言っただけで。新規則とかいっただけで棒がちようど少尉分余ってたんだ」

「いえいえ、皆さんと一緒出来て光栄です」

森の中、木々に囲まれた細い畦道を歩きながらメイトは隣を歩くジョーカーにすまなさそうに言う。それを聞いたジョーカーは両手の平を胸の位置で左右に振り、本当に楽しそうな微笑をメイト、そして前を歩くイオスとコリーに向ける。

「貴方は槍使いだったんですね、入団試験のときは魔法を使ってい

たような気がしましたが。それにその歳で武器の収束なんて素晴らしいですね」

「ええ、魔法も少々心得ていますから。でもイオスさん程の物ではありませんよ」

「何だ、ストーカーか？」

「メイトさん、私が人事管理もしている事を知ってて言ってますよね」

メイトが含み笑い浮かべながら言ってるのを見て、イオスも含み笑いで返す。ジョーカーは体の何処にも槍を持っていない。

「でも戦術の幅が広がるので凄いいと思います、私も防御魔法を覚えたいのですが……なかなか」

あはは、と自嘲気味に笑うコリーへ「私もそんな物ですよ」と、口元を手のひらで覆いながら楽しそうに笑っているジョーカー。会ったのは初めてらしいが二人の放つ雰囲気はもはや同世代の友達といったものであり、魔法の話から料理の話へと、歩いているうちに次々と話が展開していく。

「所でメイトさん、ユーシアへは後どの位ですか？ この辺りの地理はそこまで詳しくないもので。三時間以内に着かないと夜営をする事になりますよ」

「……もう少しだ」

一瞬だけ表情を固くしたが、誰かが気付くよりも早くそれを消したメイトはそう答え「そこを左だ」と先頭を歩くイオスに分かれ道の指示を出す。

「ああ、もう少しだ」

口から出る前に消え入りそうなその呟きも、誰にも聞こえはしなかった。

「着いたか」

途中、獣タイプの魔物が多くなってきた事と道の指示が面倒にな

つたので先頭を歩いていったメイトがそう言ったのは、太陽が西の空に沈みかけて世界を朱く染め始めた頃合いだった。

畦道からある程度踏み固められている道になっており、木々の伐採が目立つようになっていきている、言う所の自然森の終わり。視界が開けた場所に、一つの村が見える。

「風情ある村ですね」

朱い斑雲の下に広がる木造建築式の低い民家と田畑、そして村を横断する河に牧場。丘の上から見下ろすコリーは素直な感想を漏らした。

「つまんねえ間違いだろ」

メイトはと言うと、ここに近付くにつれて明確にはっきりと機嫌が悪くなっており、吐き捨てるように言い、丘を蛇行する下り坂へ歩を進める。

「どうかしたんですかあ？」

「別に」

ジョーカーの問い掛けにもこの調子であり、村が原因だというのは誰の目から見ても明らか。村の広さは半径三〇〇から五〇〇程度と小さい。山賊に襲われている割には家や土地に損傷は見受けられない。

「イオス、頼んだものは持つてるよな」

「ええ、でもあんな物を何に使うんですか？」

何も答えない。ただ黙々と歩き、感情は心に閉じ込めているかのように顔から一切の表情が消されている。そのメイトの様に圧され、それから誰も口を開こうとはせずにメイトの後ろへと続く。

村の入り口には見張り役の青年が立っていた。手には鉄製の易そうな剣を握っている、如何にも田舎らしい風貌の筋肉質な男はメイト達の姿を見ると何故か慌てて走り出し、村の中へ。

小さく、だが聞こえる程度の舌打ちをしたメイトは足を速め、門というにはあまりにも質素な針金を巡らしただけの柵の前まで行くとそこで足を止め、

「ヴァーミルフルーツ独立軍だ、村長ワクエイルからの依頼で来た！」

と声を張った。メイト以外の三人は村の様子を見て、何かおかしいと感じ、感じたのとほぼ同時に応えに至る。

——村人が居ない。

暫く、立ちっ放しで待っていると村の奥、丁度四人からは民家で死角だった場所から老人がこちらに向かって歩いてくる。齢は七〇代後半だろうが、全ての髪は白髪となり元々の色が何であったのかは定かではなく、ごくごく少ない。顔や綿製の服から覗く肌には皺が深く刻まれており浅黒い。腰が曲がっていて、歩くスピードはかなり遅い。出て来たのは老人だけでは無かった。おおよそ五〇人程度の老若男女、中には半獣人や末天人も混ざっているが、全体的に人間が多い……そして、皆一様に怯えた表情を浮かべている。

「久し、ぶりだの……メイト」

何分も掛けてメイトの前まで近寄り、絞り出すようにしゃがれた声を出す老人。重く弛んだ瞼の隙間から覗く黒い瞳はどこかおぼろげ。

そんな老人に挨拶を返す事無く、短く「依頼内容は」と言うだけに留めるメイト。

「メイト中尉、いくらなんでも無礼が過ぎます」

「いいや、良い……のだ」

メイトの態度に堪らなくなったコリーは詰め寄り、抗議しようとしたがそれを老人が止める。それでも見逃せないらしく「ですが」と何かを言おうとしたコリーの肩を、イオスが掴んでメイトから引き離す。

「この村から、東に……げふつ、二キロ辺りの森に、巢食う山賊団の壊滅、じゃ」

「頭領の名前は」

——確信。

メイトはこれまでに無い、まるで老人を視線で射殺そうとしてい

るような鋭い目付きで聞く。後ろに取り巻いていた村人達が皆それを見、直接向けられている訳でもないのに一歩後退りをする程のそれ。しかし老人は臆することなく、はつきりと一言。

「ランジリー」ヴァルター」

と、答えた。剣が鞘走る……鈴虫の鳴き声の様な音が、村の入り口に鳴り響いた。

「まさかあんな事をしでかすとは、流石の私も肝が冷えましたよ」
「……」

4つのベッドの並ぶ狭い個室、窓からは完全に闇に支配された黒が広がっていて、イオス、メイト、コリーがベッドシートの上に座っていた。三人とも表情が険しい。

二時間前、メイトは『ランジリー」ヴァルター』と老人が言った瞬間、有ろう事かその首目掛けて剣を抜いた。それに逸早く反応したのはイオスであり、無詠唱の風の魔法を手から出してメイトの体を吹き飛ばしたのである。老人に怪我はなく、メイトの行動を咎めはしなかった。その上、何事も無かったかのように四人が今晚泊まる為の宿まで用意してくれたのである。コリーは何も話さない、いや、先程まで今声が枯れるまで激怒していたのだ。

「ここは、貴方の故郷でしたよね」

「お決まりの人事……か」

コリーに張られて赤く腫れる頬を小さく動かして漏らす様に言うメイト。その声色は何処か悲しげな色を含んでいる。

「……何があったのか、話してくれませんか」

「……」

「話してくれないと納得が出来ませんし、貴方の事を軽蔑します」
「……」

冷たく話し掛けるイオスの表情に嘘は無い。メイトは堪える様に口を結ぶ、しかし堪えきれずにクツクツと自嘲気味に笑った。

そして、
ゆっくりと、
噛み締めるように、言葉を紡ぎ始めた。

闇を払うための電気の明かりが無い、淡い月明かりだけが頼りの村の片隅、何軒かの民家は明かりが点いているがそれだけでは少女の足元さえ照らせていない。だが、少女はあえてそんな場所を選んだのであり、闇よりも濃い軍服のポケットから小さな複数の何かを取り出す。

「もう少し……保つてくれないと困るのよ」

息をぜえぜえと荒げ、少女はその何かを口の中に放り込み、噛む事無く一気に飲み干した。と、同時に少女は噎せ返り、耐え切れずに地面に膝を屈する。胸の位置に左手を当て、右手は激痛に耐える為か少し湿り気のある地面に爪を立てている。

「ゲホッ……ゴボッ……はあは……グッ、カハッ!!」

咳は酷く、胸に当てていた手を口に移し押さえるも、それは何の意味もなさずに咳と混ざって出て来た血に汚れるだけだった。地に持って行った手も、地面に染み込んだ大量の血の混ざった砂で汚く塗れ。

「もう少し……せっかく、面白そうな事になって、きてるんだから……」

少女はまた、震える手をポケットに伸ばし、何かを取り出してそれを貪る様に口に入れてまた飲み込んだ。そこでようやく咳は収まり、元通り荒い息だけが口から排出されていく。

何も無い所から漆黒の、まるで爪楊枝の如き槍を取り出した少女はそれに掴まり、杖代わりにしてザクツザクツと歩いていく。村の中心にある細長い河、清流のそれに少女は自身の血で汚れた両手を沈め、綺麗に血を落としていく。そして同じく血でよごれた口元にまで水を掬って洗い流す。流石にうがいはいらないらしい。水面を鏡

代わりに自身の顔をチェック、どこにも血は付いていないのを確認したスクツと少女は立ち上がり、いつもの調子で、

「さて、詰まらなそうな話は終わりましたかね」

透き通る響きの良い声でそう言い、普段通りの足取りで歩き出した。手に、槍はもう無い。

昨日のと良く似た、と言うよりは実際昨日と同じ森の一部。朝の六時、朝露を含んだ草木のお蔭で辺りは初夏だというのに結構涼しい。それは暑苦しい軍服姿で歩いている四人にとって幾分嬉しいものであるはずだ。

「早朝に攻めるというのは意外に、夜に襲う事よりも効果的です」
独りでに話し始めるイオス。だがそれは独り言と言うよりは確認、といった感じであり、普段よりも物静かな口調は同時に周囲を警戒している事が分かる。

「ある程度訓練された組織や敵の多い組織では夜襲というのは逆に不利になる事があります。昨日メイトさんが提案した作戦を実行し、最低限の死者で済ませましょう」

事務的に言い、三人が後ろに付いて来ているのを確認したイオスは喋るのを止め、再び前だけを見て歩きだす。

一〇分程度沈黙を貫いて歩き続けていたイオスは、不意に足を止め、手の平を三人に向けて制し、一言。

「どうやら、着いたようです」

木々が生い茂る、道無き道前方五〇メートル程、一軒の二階建てログハウス。規模は通常の五倍程度あり、一階建てのそのの前には三人の男が立っていた。屈強な筋肉と剣や小振りの斧を手に持つ男達は、出で立ちからある程度の戦闘の訓練を積んでいるのが分かる。「予想より手練れみたいですが、作戦を変更するほどでは無さそうですね」

辺りの地形や家を確認しつつイオスはそう言った。

「用意は良いですか？」

「はい」

「いつでもどうぞ」

振り向いたイオスに、コリーは少し緊張気味の面持ちで、ジョーカーはいつも通り微笑を浮かべて答えた。だが、メイトだけは黙ったまま。表情は何処か後の無い様な切羽詰まった様に固く。

「メイトさん、宜しいですか？」

「……ああ」

再度の確認、息を深く大きく吸ったメイトははつきりと応答。表情は相変わらず心配そうな色が見え隠れしているが、瞳には覚悟を決めた鋭い光。

「合図を」

イオスは信頼した柔らかな声色で、コリーは両手に銃を握り目を閉じ、ジョーカーはいつも通りの微笑みを浮かべて空から槍を取り出して、言葉を待つ。

——大丈夫、落ち着け。

こいつらが居れば、大丈夫。

終わらせるんだ、過去ってやつを。

メイトはログハウスを一瞥後、三人に向かって言う。

「作戦、開始」

しっかりと、感情の入った重みのある合図。メイトが言うのと同じに、四人はバラバラの方向へと走る。

コリー、遅れてイオスが三人の山賊に向かって一直線に走駆。森を抜け、視界の開けた庭に出た。

「何だ！？ お前達止まれ！」

「紺黒い軍服……？」

「ヴァーメイルフルーツか！」

気付いた山賊達の内二人は武器を構え、もう一人はすぐさま踵を返してログハウスの玄関扉へと走る。だが、一発の銃声と共に、男は意識を失い倒れ込んだ。血は吹き出していない。

「何だ……？ ゴム弾——」

倒れた男を見て状況を把握しようとした男も、コリーの銃が撃ち出すゴム弾を眉間に喰らい、後ろへと仰け反ってそのまま最初の男の上へ。

「敵襲——！！ 敵襲——！！」

——山賊にしてはよく仕込まれていますね、と感想を抱いたイオスは最後の男に向けて風の魔法を放つ。詠唱をしていない魔法は威力があまり高くないものとなるが、虚を突かれた敵の足元を掬い上げる位は容易、男は地面から起こる突風に煽られて体勢を崩し、そのまま後頭部からハウスの木の階段に落ち、昏睡した。

コリーとイオスはログハウスの中には入ろうとせず、入口から二メートルくらいの芝生の上で立ち止まった。一瞬の間を開けて、扉から大勢の人が溢れ出す。種族に関係なく皆、見た目は二〇代前後と若く、中には女性も混ざっている。

——黒髪の女性は居ない。

一秒も掛からない内に全員の顔と特徴を把握したコリーは入口に群がる者達に向けて適当に乱射。ゴム弾とは言えども威力は馬鹿に出来るものではなく、一人また一人と何もしないまま倒れていく。

「退け！ マクリー早く来い、銃撃戦だあああ！」

入口から出るのを諦めた山賊達は一団ログハウスの中へ。男達がマクリーという名を呼んでいる、言葉から察するに恐らく銃使いであろう。その隙にコリーは素早い動きで片方の銃の弾倉を抜き取り、もう一方で撃ち続けながら片手だけでズボンのポケットからゴム弾と取り出して器用に弾を積める。

「マクリー——ランパレード推参——！」

扉からひよっこり頭だけ出したのは肩口まである少し癖毛気味の緑髪をしている、尖った長い耳を持った二十歳程度に見える女性、コリーはその頭に向かってすかさず発砲——しかし相手は間一髪のところ「うわっ」と頭を引き、代わりにメートル程の長く黒い銃身のそこから突き出して発砲した。コリーの物とは格段に違う重

く腹の底に響く様な音が森に鳴り響く。

「ック……！」

銃身が見えたのと同時に反射的に飛び退いたコリーの、先程まで立っていた地面が爆ぜた。砂埃さえ上がらない圧倒的な貫通威力、半径五センチほどの穴が作られている。

「まさかあんな物を持っているとは……、コリーさん！ 私の盾ではあの貫通力は防げません！ 一旦森へ！」

「了解」

イオスはあつさりと自分の魔法の不利を認めて撤退を提案、コリーも分かっていたらしく短く答えて走り出す。上半身だけを振り向かせて、狙う撃ちされるのを防ぐために玄関、特にマクリーの居る側へ重点的に撃ち込みながら木々の後ろへ隠れた。

「うひゃー、相当腕良いよあの女の子」

「行けそうか？」

能天気な調子で笑うマクリーに対し、隣に立つ半獣人の男が心配そうに問い掛ける。

「んー？ さあね、楽勝では無さそうだ……よっと！」

マクリーは扉から飛び出して森へ発砲、だが、身を露わにしているにも関わらずゴム弾は飛んでこない。

「オマケに私の実力も分かったみたいだしね、簡単に餌には釣られてくれないよ。多分一番近い木々のどれかには隠れてると思うんだけど、距離大よそ三〇、あのタイプのハンドガンの射程限界は約五〇メートルだけど、ゴム弾だとそれは半分になる。つまりあの距離から攻撃しても無駄なのさ」

「ん、ん……お前普段馬鹿なのにこういう事だけは真面目だよな」「うっせ馬鹿。まあ、私のアサルトライフルの射程限界は約二〇〇メートル。純粋な銃撃戦だったら私が勝つよ」

マクリーの強気な言葉に山賊達は「おおお！」と歓声を上げる。

「だけどね」と釘を刺す様に言うマクリー、声は軽いが目は真剣そのもの。

「これは銃撃戦じゃない、あっちには頭の良さそうな魔術師さんが居たからね」

連続する軽快な銃声が響いてくる中、メイトとジョーカーはログハウスの丁度裏側に居た。

「よし、一階には窓が無え……行ける」

「本当に行くんですか？　いくらメイトさんでも危険だと思いますよあ？」

心配そうにメイトの顔を見上げるジョーカー。

「それを言うならお前もだろ」

「私の場合は攪乱なので、頃合いを見計らって逃げますよ」

「はは、そうしろ。それで十分過ぎるだろうしな」

ジョーカーの言葉に久しぶりの笑顔をこぼしたメイトはログハウスの二階、窓の並ぶ壁を見つめる。

「そろそろ出してくれ」

「分かりました」

メイトは笑顔を消し、再び緊張感のある面持ちでジョーカーに言った。了解したジョーカーはまるで手品師の様に腕を振る素振りだけで一瞬にして昨日使っていた柄刃一体の槍を取り出す。

「装備の召喚つてやっぱ便利だな、俺にも今度教えてくれよ」

「はい、基地に帰ったら適当に教えます」

適当かよ、と呆れる様に言うメイトに、悪戯のバレた子供の様にクスクスと笑ったジョーカーは二メートル以上はあるその槍をログハウスの壁に立て掛けた。軽い金属で造られているらしいその槍をメイトは片手で向きを微調整し、

「じゃあ行ってくる」

と言って槍に飛び乗り、更にそこで飛翔、垂直の壁を擦るように

一回だけ蹴って微妙に距離を稼ぎ、二階の窓枠にぶら下がった。

「助けてほしい時の言葉は何でしたっけ？」

「バーカ、そんなの無えよ」

——緊張感の無い奴だ。まるで緊張してる俺の方が馬鹿みたいじゃないか。

下から冗談っぽく言うジョーカーに向かい、一瞬だけまた顔を緩ませたメイトは窓枠を掴む指にグツと力を入れて懸垂けんすいの要領で体を持ち上げ、剣の柄で思い切り窓を割った。

「行つてらっしゃい」

最後のジョーカーが言った言葉を聞き取れていないのか、メイトはガラスの鋭利を柄で丸くしていき、部屋の中へ飛び込んだ。

「よっと」

四畳程度の狭い個室。散らかった毛布が三枚並べられているだけの所を見ると、どうやら寝室としてしか使っていないらしい。

「誰だ——ツカハ」

「つぶねえ……」

窓の割れる音に反応したらしき男が、部屋の扉を開けた刹那昏倒。
——そこまで大きな音は立てない様にしたんだが、流石……調教はしてるんだな。

というより、色んな人種が居るな、手強そうだ。

足音に反応していたメイトは、男の眉間を殴り付けた剣の柄を引き、倒れ掛かってきた末天人の男を受け止め、ゆっくり床に倒した。
「行くか……」

第一章 第四話 才能の違い

部屋から出ると人影は見当たらず、階下から多人数の話し声や歓声がメイトの耳に届く。

——押されてるのか……？

メイトは結果的に囷として置いてきた二人の身を案ずるが、外の様子を見るには今居る廊下から何処か部屋に入って窓から外を覗く必要がある、無駄な時間と危険を増やす事になる。

「まあ、イオスが居るから大丈夫だろうし……アイツの声はしてねえ」

細心の注意を払いながらメイトは出て来た扉側の壁を伝い、慎重に隣の部屋、隣の部屋と中を確認していくも、誰も居ない。

「いねえ……」

少しだけ焦った表情を浮かべつつ、メイトは次々と扉を開けていく。

だが、探し人は居ない。遂に何十メートルもある廊下の一番奥、最後の扉を開け放つても中には誰も居らず、ただただ散らかった化粧道具と毛布が有るだけである。

当てが外れた、と苛立たしそうに親指の爪を噛んだメイトは仕切り直して向かい側の壁に張り付いた。

「次はこつち側の扉……か」

少しだけ荒くなっている自身の息を押し殺し、メイトが最初の扉を開け——

「相変わらず神経質な行動だなあ、全部バババァンって開けていけば楽なのにな？」

「——ッ!？」

突然背後から投げ掛けられた言葉。メイトは腰に提げていた鞘に手を伸ばしながら振り向こうとしたが、それよりも早くメイトの背中に衝撃。

「ぐあ！」

パン！ という平手で思い切り叩かれた様な痛み、短い悲鳴を上げたメイトは前のめりに倒れ込んだ。まるで陸地に揚げられた魚の様に口をパクパクと動かすが、なかなか息をすえずに咳き込むばかり。

「昔から義母^{かあ}さんの稽古の時も今みたいにまどろっこしい手順で技を覚えてたよなあ、メイトオ？」

「……ゲホッ、ゲホッ……はあ……ランジリー……」

「ランジリーお姉ちゃん、だろうが」

振り絞る様に言ったメイトは、木の床に手を付いた四つん這いの状態で背後で喋るランジリーに、下から覗き込む形で顔だけを向ける。

よお、と男勝りな口調でメイトに手で軽く会釈をしたのは極めて露出度の高い、二十代中盤に見える赤い女。左右に跳ねまくったボサボサの赤い髪はちょうど太腿あたりまで伸ばされており、それと同色の垂れ獣耳、瞳は朱色で相手に対して挑戦的な猫目で、^{たわ}撓^{たわ}な張りのある乳房を前が大きく開いている真紅のスポーツブラで隠し、太腿の半分にも達していないような薄茶色の短いジーンズを履いているだけである。

そして、肩には彼女の身長を軽く凌駕する一振りの戦斧が担がれている。担いでいるだけで天井に届きそうな戦斧を、彼女は肩と右腕一本で支えているのだ。

「そっちはより一層、バカっぽくなってるじゃねえか。遅寝遅起きの精神は改善したのか？」

息を整えたメイトが、それ程ダメージは無かったのかスツと立ち上がり、ランジリーを睨み付け、半ば笑う様に軽い調子でそう言いながら鞘から剣を引き抜いた。戦斧と比べると刃渡り1メートル以上あるメイトの剣が玩具の様にさえ見える。

「流石にこんな馬鹿騒ぎのBGMの中で寝れる訳無いだろ？ お前の方が馬鹿になったんじゃないのか？」

「すまねえ……馬鹿の聴覚の感度は、分からん」
一步。

メイトは三メートル程空いていたランジリーとの距離を瞬く間の
一步で詰め、振り上げていた剣を少し斜め気味に振り下ろした。

不協和音。

「何で剣を使わない」

「こいつの方が山賊っぽいでしょ？」

ランジリーは肩に担いでいた斧の位置を僅かにズラし、剣の刃を
金属製の柄で受け止めて弾き上げ、メイトの腹部にブーツの厚底を
叩き込む。間一髪の所で剣を握っていなかった左腕でそれを防いだ
メイトは力に逆らわずに背後に飛び、距離を離す。

「いつかはこうなると思ってたけど……剣柄稽古を思い出すなあ」
すぐに距離を詰めて来ないのを確認し、昔を懐かしむように遠い
目をするランジリー。

「……負けた方は刃、勝った方は柄で試合」

「木刀だからと言っても下手に食らえば怪我じゃ済まない。強い方
は扱い辛い柄で戦って実力の調整を図る実戦稽古だったねえ、はは
は」

「ああ……俺はずっと、刃だった」

苦虫を？み潰した様な苦しい表情を浮かべるメイトは、愉快そう
に笑うランジリーを睨む。

「はははははははは、はあ」

一頻り、まるで友達と遊んだ時の楽しい思い出を噛み締める様に
笑ったランジリーは一旦声を区切り、突然、先程までの様子とはま
るで違う……冷やかな表情に。

「何となく想像は付くよ、村の豚共がヴァメフに依頼をしたんだよ
ね？」

表情一つ変わっただけにメイトは蛇に睨まれた蛙の如く
緊張した面持ちとなり、短く「ああ」と返答。彼の頬を伝う一筋の
汗がヤバさというものを醸し出している。

「表、何人かまでは分からないけどうちの味方を引付ける為の軍人メイトは、私の寝起きの悪さを信じて裏から侵入して私を起きない内に拘束か殺害、上と下から私達を一網打尽っていう作戦、かな？」
声自体は全く変わりなく朗らか。しかし考えは全ての中、メイトは何も答えない。

「ただ」

一度言葉を区切るランジリー。口角だけが焦らすようにニヤアと上に持ち上げられ不気味。

「人数は山賊狩り如きにそんなに用意されてないだろうけど……この裏に、他に仲間が居るでしょ」

ランジリーが言った瞬間、階下から「いたぞー！」という男の声。

「困りましたねえ、作戦と違うじゃないですか」

言葉とは裏腹に、さほど困ってなさそうな透き通った声。

ジョーカーは苦しそうに地面でもがく男に一撃を加えて静かにした。もちろん、槍の刃とは逆に丸く作られている取っ手で後頭部を、である。

すぐに仕留めたのは良いものの、即座にジョーカーの周りには人垣が形成された。その数二十以上。

「こいつは飛び道具じゃなさそうだ、一気に片付けるぞ！」

どうやら指揮を執っているらしい刈上げ茶髪の人間の男がそう言うのと、全員がじりじりとジョーカーに向け距離を詰める。少女だから、と油断している風には誰も見えない。

「ふふふ、それはどうでしょうか？」

意味ありげの淑やかな笑い。その意味を探る様に距離を詰める足を止めた山賊達は、先程のコリーの射撃の様になるんじゃないかと警戒し、俄かにざわめく。

その光景を舐めるように見渡したジョーカーは「あははは、今さら遅いです」と笑いながら天に掌を突き出し、詠唱を始める。

「嵐の断片、波状の大勢を現さん……我が咎を喰らいて力と成せ」
「やばえ……！ 全員逃げろ……！」「魔法使えるのか……？」「しかも強そうじゃん、距離あけるおお！」「クツ」

詠唱の長さは直結して魔術の威力になるものであり、途中で止めてもある程度の威力を発揮する。術者が途中発動を結構する前に攻撃することで魔力を霧散させて発動を中断させることも可能だが、間に合わないとは判断した山賊達は一目散に逃げの体勢を取った。

「我に仇成す敵を……」

山賊の誰もが発動を予期し、地面に蹲る。槍を持っているという事、そしてそれで味方を殴ったという事実だけで近接型だと判断した山賊は頭を抱え、己の浅はかさを後悔。

しかし、ふと違和感。

いつまで経っても魔術が発動しない。

「ゲホッ……ツク、カハッ……」

呻き声、そして苦しそうな咳。詠唱の代わりに聞こえてきたのはそれだった。

「……ツク、全部お見通しってか？」

ジョーカーが見つかったことにあからさまな動揺の色を顔に見せ、ランジリーに剣を向けるメイト。

「さあ、これ以上の何かがあるなら分からないけどねえ……さあメイト？ 今日メイトが刃の役だよ」

ランジリーは右手で戦斧の刃ぎりぎりの所を掴み、大きく構えを取る事で廊下を塞ぐ。刃の部分が完全にランジリーの体を覆い隠しており、隙が無い。本来は重みを利用した豪快な一撃を打てる代わりに、行動の速さに制限が掛かるはずの戦斧であるが、片手で扱っているところを見ると分かる、大前提から違う。

「時間が……無えんだよ！」

いつの間にか劣勢になっっている事に危機を感じたメイトはランジ

「弱い奴が調子に乗ってんじえねえ！」

「ぶっ飛べこん畜生——!!」

「うわぁ ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！ ゲフツ！」

「死ね」

を避ける。轟音。

「くそ……つたれ」

「じつじつじつじつ？ ランズリーさん」

「この方が山賊のリーダーですね」

メイトの背中、ランジリーの首筋にピタリと鉄の感触。

マクリーとコリーである。二人は二人が二階から落ちてきた際に相手の射線上の死角を取る形で銃を突き付けたのだ。しかしランジリーとメイトは手を挙げる事無く睨み合う。

「マクリー、大丈夫」

「コリー、俺がやる」

二人の強い芯の通った声色を感じ取ったコリーとマクリーは少しの躊躇いを見せたが、互いに人質のいる状態では仕方が無いと銃を引き、少し後ろに下がった。

と、同時に発砲。マクリーとコリーはほぼ同等の射撃戦を繰り広げていきながら、森の中へと消えていった。森の中からくぐもった発砲音が何発も鳴り響く。

いつの間にか殆どの山賊の姿が玄関から消えているものの、そんな事には二人とも気付いていないかのように静かに相手との距離を測る様に足を前後に運ぶ姉弟^{しまい}。

「こうしてると、昔を思い出すねえ」

全く気を緩めることなく、緊張感のない声でランジリーは語りかける。

「なあ、もう止めにしないか」

「はあ？」

メイトの言葉にランジリーはこれ以上に無いほど不愉快そうに眼を顰める。

「メイトオ、それは真面目に言ってるの？」

「何か可笑しいか？」

メイトの真顔を見詰めるランジリーは一瞬メイトと同じ真顔に、そして間髪開けずに笑い始めた。

「思い出せよメイト、お前も本当は憎いんだろ？ 軍に入ったのも、村に居続けたら殺しそうだったからだろ？」

地面に戦斧を突き刺し、愉快そうにゲラゲラと両腕を広げて笑い始めるランジリー。

その様は、何処か妖艶で、何処か自嘲気味な笑い。

第一章 第五話 その女、剣の才塊

「全く、貴方も無理しますね」

「ふふ……そうでも無いですよ。大尉さんが な・か・ま を野放しにするはず無い、と思つてましたからね」

口元に掠れた血の跡があるジョーカーが、軍服についた砂埃を丁寧にはたき落としている最中のイオスに向かって淡い微笑みを浮かべる。

「あはははは、それもそうですねえ。何故、仲間が居るのかは分かりませんが、それはまだ聞かないことにしておくとしましょう」

赤い眼を楽しそうに緩ませ、乾いた笑いを口にするイオス。ログハウスの裏、二階の窓が割れている丁度その下には、まるで眠っているかのように昏睡する山賊達が転がっていて、その数は一〇や二〇では済まない。全員、何の傷も負っていない。唯一大きなタンコブのある男が一人居るだけだ。

「本当ならもつと上の階級になれるんじゃないですか？ この力があれば」

「それはお互い様でしょう」

「そうですね……でも私にはこれがありますから」

倒れている男の背中にちょこんと座るジョーカーが自らの口元に付着した血痕を指差す。

「確かに、どんな病かは知りませんが難儀なことで。ところで……、私がもし来なかったらどうしてたんです？」

「気になります？」

ジョーカーが言ったのと同時に、一陣の風。

強くもなく弱くもないその風になびく青い髪を押さえ、彼女はイオスに再度「気になりますか？」と問い掛ける。

一拍の時間。通り過ぎた風を惜しむ様に見えるイオスは、静かに首を振った。

「多分、そろそろ終わるでしょうね。どうしますか？」

話題を変え、表が気になるのかチラチラと見えもしない壁の向こうに視線を送りながらイオスはジョーカーに手を差し伸べた。

しかし、ジョーカーは首を振って、

「私は、少し化粧直しでもしておきますよ、レディにこんな姿で人前に出るなんてデリカシーがないですねえ」

「それはそれは、失礼しました。なら僕はそろそろメイトさんの様子でも見てくるとしましょう」

おどけ合う二人は、お互いを探るような眼付きをしながらも、楽しそうに笑う。

一つの剣筋。一本の障害。

メイトは実の姉に向かい、剣を全力で振り抜く。歯切れの良い金属音。ランジリーは尽くそれを戦斧の柄と牽で防ぎ、隙を付く形で蹴りを見舞う。

「ツチ」

顎を蹴り上げられたメイトは力に逆らわずに後ろへと飛んで威力を殺す。

攻撃の当たらない焦り、不安。幼少時代より稽古で負け続けていたメイトを襲う固定観念。

——やっぱり……、勝てないのか。

二人の戦法はまるで鏡に映したかのように正反対の物である。

一撃一撃が重い殺傷性を孕んだ、ガードを決じ開けようと連続で襲いかかるメイトの剣。

堅牢な防御を心掛け、相手の隙をついて素早い攻撃で確実にダメージを蓄積させていくランジリーの格闘。

鉄の巨魁、防御に不利な戦斧であるにも関わらず、先の攻撃が分かっているかのように巧みに防ぐランジリーに、戦いが始まってから数分、メイトはまだ一撃も与えることが出来ていない。

「重塵岩牙じゅうじんがんが！！」

距離が離れ、メイトが着地した瞬間、ランジリーの戦斧が地面を深く抉り、振り抜いた際に地面が爆ぜた。爆発系の魔力を武器に注いだ溜めの大きい技。

大量の石や砂の塊がメイトに襲い掛かる。

「くそつたれ！！」

左右に逃げ切れない程の広範囲に渡り飛沫する砂塵の矛。メイトは剣で大きい石飛礫いしつぶてを叩き落とすが間に合わずに直撃を見舞う。

「お前、軍に入ってから更に弱くなったんじゃないか？ 一年半、馬鹿みたいに遊んでたんだろう」

砂煙でメイトの姿を確認出来ないランジリーは、戦斧を下段に構えて挑発する様に言葉を投げる。

「そう見えるなら、そうなのかも……な！」

大地を蹴り上げ、最高の初速で砂嵐から剣を脇に構えて飛び出すメイト。更に一步、地面を蹴り、半身の状態で速度を乗らせた最高の奇襲。

「だから弱いつて言ってるんだよ」

ランジリーは戦斧を放り出すように手を離し、僅かな時間だけ前に浮かばせて間髪入れずにその峯をブーツの靴底で押し出した。

「なっ！？」

メイトは飛来する巨大な鉄の塊に虚を突かれ、無理矢理に体を回転させて遠心力の付いた剣戟でそれを弾き飛ばす。

「相手の武器の特性の見誤り、お前は剣でなく斧を使うアタイを馬鹿だと思ったのかは知らないけど」

戦斧を薙ぎ払った先、既にランジリーの姿は無い。声は自分のすぐ近くで聞こえるのに姿だけが無いという状況、メイトはすぐさま空を見上げた。

「何を使っても使わなくても、アタイはお前より強いんだよ」

下方。足を限界まで開き、地面すれすれの位置にまで尻を落とし力を溜めていたランジリー。メイトがそれに気付いた時、既にそ

の牙は顎を抉っていた。

「カッハッ……！！」

全身をバネにした零距离からの掌底アッパー。魔力は含んでいないらしく、純粹な打撃であるその攻撃はメイトの体を数メートル宙に弾き飛ばす。

「ゲブッ」

首がもげると錯覚する衝撃の後、色^{いろにじ}滲み歪む世界。

視界は暗転し、自分の体が玩具みたいに転がるのをメイトは客観的に捉える。

『いつかは、男の方が強くないといけないよ』

——ええー、でも僕じゃお姉ちゃんに勝てないよ……それに母さんより強い男の人なんて見た事ないよお。

『つぶ、はははははは！ そんな事無い、ごろごろと……は居ないだろけど、沢山居るよそんな奴は』

——うーん……そうかなあ。

『——』

*

「すみませーん、どなたかいらっしゃいますか？」

俺の住んでいた孤児院に、その芯の強さを感じさせる低い女声が響いたのは、俺がまだ八歳になるかならないかの時だった。

ああ、また誰か居なくなるんだろうなあ。

俺はそんな事をぼんやりと考えながら、周りの名前もよく覚えていない男友達数人と積み木を組み立ててガタガタの城を築きあげる作業へと意識を戻した。

この羽振りの悪い時代、趣味で孤児院を経営をしているという四十路過ぎの小母^{はお}さんと、客の女の人^{おんな}が話す話し声が聞こえてきたが、幼い俺には何を話しているのかは分からなかった。

「む、君、ちよっとこっち向いて」

肩をトントンと指で叩かれ、何だろう？ と積み木を積む手を休め、俺は後ろに振り返った。

「だあれ？ おねーさん」

「おやあ、ここの教育はなかなか良さそうだねえ」

前屈みに俺を見下ろしていた女性は僕の言葉を聞いて嬉しそうにケラケラと笑い出した。

目鼻立ちの整った顔、人間の物より末天人を現す代名詞的な垂れた長耳、そして短い黒髪を持つ……何も話さなければクールな印象だろうが、花が咲いた様な笑顔のギャップはそれはそれで魅力的な二十歳過ぎに見える女性。

「私はデイルティー」ヴァルターっていうの。君は？」

「僕は、メイト」何とか」

幼いころに孤児になり、自分のファミリーネームを忘れてしまっていた俺がそう答えると、デイルティーは優しく俺の黒髪を撫でた。
「君、良い眼してるねえ」

デイルティーが深みのある黒い瞳で俺の目を覗き込んだが、幼い俺は、自分と同じ目の色だから褒めてくれてるのかなあ？ と、的外れな事を頭に浮かべていた。

「うん、強くなりそう。すみませーん」

そう呟いたデイルティーは俺の髪から手を離し、再び小母さんの元へ歩いて行ってしまい、何だっただろうと訳が分からなかった俺は再び、手を止めてくれていた友達と積み木を絶妙なバランスで積む作業を再開した。

数分後、すっかりデイルティーの事を頭の隅に追いやっていた俺の元に、再びデイルティーは戻ってきた。

「ねえねえメイト君、私と家族になってヴァルターの名を継がない？」

「ふえ？」

言っている意味が分からなかった。

だが、この後彼女は面倒な手順をしつかりと踏んで、俺を養子に

引き取ってくれて……、後日、言葉の意味が分かることとなった。

「ランジリー！ もっと剣筋を良く見る、予想でガードしない！
メイトはもっと腰を入れて勢いを殺さないよう！」

メイト、一二歳。

ランジリー、十七歳。

お揃いの絹製Tシャツを纏う二人、朝日照らす広い庭にて吹き飛ぶ。

剣を模った木製の棒が高々と宙を舞い、ランジリーの防御の隙、メイトが振り下ろす隙に素早く木刀の峯で二発叩き込んだディルティーは地面に這い蹲る二人に向かって鬼の形相で言い放った。

「もう……一本！」

即座に立ち上がったランジリーは脇に落ちた木刀を拾い上げて再びディルティーの前に立って構える。

「よし！」

立ち上がったランジリーに満足気に頷いた白いワンピース姿のディルティーは、今度は峯では無く木刀の切っ先による突きを放った。全くの容赦ないスピードの突き、ガードを試みるのは逆に危険だと判断したランジリーはすんでの所で後ろに下がった、だが、

「今のは最低の解答だ馬鹿者！」

下がったランジリーの瞳に向けて罵声を放ったディルティー。

深く一步踏み込み、木刀を逆手に持ち替えての斬り上げ。鈍い音と共にランジリーの木刀は跳ね上げられ、腕が上に行つてから空きの腹部に深々とサンダルが突き刺さった。

「ッ——！」

声に成らない悶絶。下がった足のまま後ろへと弾かれるランジリーと入れ替わりにメイトが飛び出す。

「でやああああ！」

気迫とダッシュ力に乗じた飛び斬り。十二歳のものとは言えども

当たればただで済みそうにはない。

「足を浮かせてどう腰を入れるつもりだ、論外！」

一見、威力の高そうな斬り下しなのだが、デイルティーは吐き捨てるように言つて手の平でそれを横払いに流した。

「うわっ！」

自分なりの答えが予想外の対処法で防がれ、精神的にも、物理的にもバランスを崩したメイトの横腹へ、ランジリーと同じくサンダルの踵かかとが叩き込まれた。

ランジリーのすぐ隣に転がり込むメイト。どうやら二人は既にとことん痛めつけられていたらしく、苦しげに呻いて地面に頬を擦る。
「ふう、こんなもんか」

二人の有り様を見たデイルティーは短く息を吐いて整息。
庭の隅、小さな庭木が立ち並ぶそこでへばっている二人の元へ歩み寄る。

「朝の稽古はここまで。少し早いけど昼ごはんにしようか」

先程までの鬼のような顔はどこにもなく、それを言ったデイルティーの顔は心の底から二人を愛しているのが分かる優しさに溢れた表情だった。

第一章 第六話 おたま！

「いただきます」

「いただきますーす」「いただきますっ」

真ん中を横切る形で小川が流れている長閑な村、その外れにある丘の上に立った木造建築の家にて、昼の号令がかかる。

行儀よく手を合わせて言うディルティーに続き、すっかり元氣を取り戻した様子のランジリーとメイトが声を合わせて言い、フオークを握った。

「ランジリー、紹介した騎士団の話。どうだった？」

ミートソースがたつぷりと絡んだスパゲッティの麺をクルクルとフオークで巻き取るディルティーは、早速口元にミートソースを付けつつ豪快に食を進めていくランジリーに問い掛けた。

「ああ、楽勝だったよ。お母さんの言う通りにファミリーネーム伏せて試験受けたけどトップ成績だった。やっぱり才能あるんだなあアタイ」

「あははは、流石私の娘。才能は置いといてだけど、その位じゃないと稽古甲斐が無い」

「置いといてって何、剣士志望は何十人と居たんだよ」

「良いなあ姉貴、僕も早く受けてみたいなあ」

「メイトはまだ無理」

楽しげな食卓。絵に描いた様な幸せな光景であり、誰も血が繋がっていない事を全く感じさせない。

メイトはランジリーに向かって「後三年経てば行けるもん」と頬を膨らませる。

「うんうん、メイトも私の自慢の息子だから心配ない」

机を乗り出してワシャワシャとメイトの髪を掻くディルティー。

「昼からは剣柄稽古としようね、私は少し買い物に行くからちゃんとやっってるんだよ」

「はい」「はい」

そこで会話は区切られたらしく、各々が食に集中していく。

—— 剣柄って、柄じゃなくて峯使ってるから剣峯じゃないのかなあ。

—— 言いにくいからじゃない？

メイトとランジリーはひそひそとそんな他愛もない話を途切れ途切れに続け、その様をディルティーは気付いていないふりをしながら微笑ましく眺めていた。

「よし、始めるかー」

発育の良い身体付きの産物を両腕で挟み込み、木刀の切っ先を真っ直ぐにメイトに向ける右肩上段の構えを取ったランジリーは言った。

昼過ぎ、ぽかぽかと世界を照らす秋の太陽が目染みる午後の庭。メイトとランジリーは村に買い物に出たディルティーを見送った後、足早と木刀を握り締めて庭に飛び出した。

「今日こそは僕が勝つからなー」

ランジリーとは対照的に、木刀を地面に流す形の右下段の構えを取ったメイトは嬉々累々と楽しそうに応える。

「お馴染み、天才の私は峯を使うという事で」

「まあ、それも今日で終わりだけど……ねっ!!」

走駆。

気取った話し方をするランジリーに言い返すや否や、メイトは駆け出した。

相手を翻弄するのが目時の小刻みに素早く左右に振れる足取り。下手に斬り込めば躲されてカウンターを喰らうのは必至だ。

「タアアッ!」

何の反応も示さないランジリーに向かってやや左の位置からの斬り上げを試みるメイト。

「逆上せ上んなし、アタイの方が五年も早く」

ランジリーは斬り上げを、下にシフトさせた木刀の峯で受け止めた。それを予想していたメイトはそのまま剣を少し手前に引き、振りかぶって頭目掛けて打ち込む。

「母さんの稽古を受けてるんだかな！」

先読みの応酬。メイトが打ち込めばランジリーがそれを防ぐ。

通常、防御というのはどうしても後手に後手にと回ってしまうため続けていればいつかは綻びが出るものである。しかし、ランジリーは全く引かない。メイトの剣戟を見切っているのだ。

打ち下ろされる寸前の手の向き、刃の方向。それらを眼で把握し、後手ではない五分の防御を織り成している。口で言うのは簡単だが、それを実践しようとしても剣戟の迫力に思わずたじろいでしまい、結果的に予想でガードに走ってしまうもの。だがランジリーは臆さずに立ち向かう。

「あつ」

短い嗚咽。先に檻襖ぼろが出たのはメイトだった。

勝負を焦るために自分の剣が徐々に大振りに、単調な攻めになっていった事に気付いての小さな後悔の念。

「貰った」

気付いた処で、懇親に剣を止める事は出来ない。ランジリーは自分の脇腹を愚直に狙いに來た牙を己が牙で絡め、メイトの手の向きと逆の方向へ弾く。

乾いた音を立てて空を舞う木刀。勝負の決まる瞬間。

「胴抜き頂き！」

玩具を買ってもらった子供の様に純粋な笑みを浮かべるランジリー。

「ぶぼぼっ」

フグの様に頬を膨らませ、タコみtainな顔をするメイト。

ランジリーの木刀の峯が容赦無くメイトの臍へその上を叩き付けた。

＊

「どうした？ もうそれでお終いとか言うんじゃないよなあ」

掌底を喰らって倒れたまま動かないメイトに、ランジリーは戦斧を拾い上げ、その先をメイトに向けて問い掛けた。

その言葉にピクリと指を動かすメイト。

——あぶねえ、意識が飛びかけてた。

眼を薄く、覚束ない足取りで何とか立ち上がる。ダメージの色は濃厚である。

未だチカチカと点滅する視界、頬を両手で叩くことで無理矢理に矯正したメイトは「そんなに柔な鍛え方してねえよ」と強がる。

「ああ、そりゃ良かった。たった独りの家族だからね……死ぬ時は印象的に死んでくれ」

ぶわっ、とした何かがメイトに襲い掛かる。それは何という事は無い、ただの純粹なまでの殺気を孕む闘気。

「姉貴のする事は昔から矛盾だらけだ、」

「……？」

「過去は所詮過去、姉貴は逃げてるだけだ」

一見、意味のない挑発。

ランジリーは言葉の真意が分からずに、訝しげに眉をピクリとだけ動かした。

それが何かを測ろうとするランジリーだったが、メイトが自分へとジグザグに駆け出したのを見てすぐに頭の片隅に追いやる。

「何の成長もしてないらしいなあ」

左右に小刻みに触れる、一見捉えにくそうな動き。

それで近寄ってくるメイトに、ランジリーは敢えて何も行動を起こさず、戦斧を構えて待つ。

後一步の距離、メイトの動きが刹那停止。

「一旦止まらないと攻撃に力を乗せられない、母さんが指摘したのを忘れたのか!？」

メイトの薙ぎ払う剣戟がランジリーに襲い掛かる。しかし、ランジリーはそれを見越し、既にガードをやや下に下げていた。

メイトの瞳が、光を鋭利に反射させる水晶の様に鋭い光を抱擁している事に、ランジリーは気付いていなかった。

数瞬後、ランジリーの体を大きく後ろへと飛んだ。

「なに……!？」

——確かに防いだはず!

飛ばされながら、ランジリーは手元に残ったガードの手応えを確かめる。

しかし、それは、

「蘭華^{らんか}B！」

休む暇を与えない追撃。

メイトは目を閉じて集中、剣に魔力を注ぎ込み、それを放つ。刀身に宿った青い魔力は振り下ろされた勢いに乗り、数本の閃光となってランジリーに^{ほとばし}迸る。

「くそっ、つたれがああああ！」

——軽い。

手に残る感触の軽さ、腹に溜まる鈍痛に気付いたランジリーは乱暴に舌打ちをし、慣性で飛ぶ体を斧を地面に突き刺すことで無理矢理に停止させ、迫り来る閃光を戦斧で薙ぎ払う。

「う……ッガ」

痺れ。戦斧を這い、直接体に通る電撃。

雷属性の魔法を伝導体である鉄でのガード、普段冷静に戦闘を運ぶランジリーは怒りでそれを失念していた。

「成長していないのは、過去に囚われた姉貴の方だよ」

いつの間にか距離を詰めていたメイト。

ランジリーは戦斧の側面でガードしようとし、腕を持ち上げる。上がらない。

ガリーマル―製の特殊な鉄で作られた見た目よりは軽い斧。痺れが抜けていない今では果てしなく重い。

空気抵抗でさえ邪魔に感じる。

躊躇いを微塵も感じさせない白刃が、苦渋に眉を寄せるランジリ―に迫る。

赤毛が、宙をひらひらと漂った。

*

「二人に、とおっても大事な話があるの」

太陽は西の空低くに位置し、今にも死にそうな淡い光を世界に届け、鳥達は何かを求めて虚ろに鳴く……、そんな夕涼みの時分。

「ん？ 何かあったのか？」

「大事な話？」

相も変わらずお揃いの動き易そうな布地の長袖シャツを着たメイとランジリ―は、腕を組んで深刻な顔をするディルティーの向かいの椅子に座った。

電気も点いていないリビングにて、何も乗っていない食卓を挟む三人。

見事なタンコブを頭に飾るメイトはその頭をすりすりと撫でる。

「母さん、仕事が入っちゃってさ。かなり面倒な」

「また騎士団からの仕事？」

「いやあ……まあ色々さ」

ランジリ―の問い掛けにディルティーは言葉を濁らせながら窓の外へと目を遣った。

「長いものになりそうだから、しばらく帰れそうにないのよ」

「しばらくって……どの程度？」

「んー、あははははは、年単位かな？ それともずっと？」

「えっ」「えっ」

メイトの問いに対し、乾いた笑いと共に吐き出された暫し、もし

くは永久の別れ。

予想だにしていなかったその言葉に、二人は口を揃えて呆けた。だがデイルティーは、ちよつとそこの八百屋に行つてくるね、と同等の軽さで言葉を紡ぐ。

「まあさつ、メイトは一五歳！ ランジリーはもう二十歳！ 二人の剣もなかなか上達してきたしお母さんが居なくても大丈夫でしょ！ それに——」

『ちよつ、ちよつと待って！ いつから！？』

見事なハーモニクス、あくまでも明るく話を進めようと、ヒクついた笑顔でデイルティーが言葉を並べようとしたのを二人は机に身を乗り出して止めた。

驚き半分、焦り半分といった二人の顔を交互に見、観念した様子で短い溜息を吐いたデイルティーは頭頂をポリポリと掻きながら申し訳なさそうに、

「昔の知り合いからさ、少し聞き流せない話を聞いちゃって。明日にでも立とうと思つてるのよ」

「そんな急に……冗談、じゃないよな」

「母さんがそんな質の悪い冗談を言つた事が有る？」

デイルティーの言葉を聞いて、静かに椅子に座り直し、言いたい事が有り過ぎて収拾が付かない頭をガシガシと掻き耷めるメイト。

「その話つて何？ 大変な用事なら私も付いて行く！」

「えあ？ …………… ちよつとそれは」

「絶対、足手まといなんかにならない！」

乗り出していた体を更に机の上に乗せ、必死に食い下がるランジリー。

付いて行く、という反応は予想していなかったらしいデイルティーは不意を突かれて間抜けな声を出してしまう。

「危ないんだよ、かなり。母さんでも微妙なラインで……もしかしたら、本当に帰つてこれないかも——」

「なら、尚更お母さんだけ行かせるなんて出来ないよ！ 危ないな

んて関係ない！ いきなりバイバイだなんて……」

「姉貴……」

眼の端に涙を溜めて訴えるランジリーは、涙るディルティーに詰め寄る。

ランジリーの頭の中を、孤児院で育った自分を拾ってくれた母、それに纏わる色々な記憶が飛び交う。

頭を抱えていたメイトもそんなランジリーを見て、頭を左右に振って覚悟を決めた真っ直ぐな瞳でディルティーを見詰める。

——それは、純粋な家族愛。

「……ッ………ふ……ふ、あははははははははは！」

当然、笑い始めたディルティー。

それはまるで、にらめっこをしていて溜まり溜まった笑いを一気に吹き出しているかのような笑い。腹を抱えて机をバシバシと叩き付ける。

「な、私は本気で！」

「いひひ、いひひっ、違う、違うの………あははははははは！」

自分の腕を馬鹿にされた。

そう思ったランジリーはみるみる顔を怒りに赤く染めたが、ディルティーは手を伸ばしてランジリーの鼻をツンツと押し上げた。

「はぁ、ふふふ。久しぶりにこんなに笑ったなぁ………うん、元気な良い子供を持った」

ディルティーはそう言うのと椅子から腰を上げて、大きく伸びをした。

同時に、メイト、そしてランジリーは糸の切れた人形の様に床に倒れ込む。

「鬼神、剣帝ディルティー!! ヴァルターの子供に相応しい口の大きな馬鹿餓鬼どもだよ。……拭いきれない程の血に濡れた私がこんなに、こんなにも幸せになれたのは、二人のおかげ」

いつの間にか、ディルティーの手には一本のお玉が握られており、それを食卓の上に無造作に投げた。

カラン、と乾いた響きを発して机の上を転がるお玉。だが、すぐ止まった。

「もっと、もっと強くなって大きくなって……その時にもし逢えたら……また、お母さんって呼んでね」

仲良く二人して隣り合うメイトとランジリー。その二人の顔の間に空いた僅かな隙間、そこにディルティーは顔を埋め、二人の肩を思い切り抱き寄せた。

「いつてきます」

第一章 第七話 重なる憎悪

「いてえ……」

朝日差し込む木造建築、窓からは小鳥の鳴き声が微かに聞こえてくる。

首元に丸い痣あざを作ったメイトは苦しげに呻いて体を起こした。ただ、メイトが言ったのは首から来る痛みに対してではない。

外から、小鳥の鳴き声より遥かに大きな泣き声が、メイトの耳を突き刺す。

「何歳になって、あんなに泣いてるんだよ」

ランジリーの、まるで遠吠えのような大きな泣き声が家に、丘に、麓の村にまでこだまする。

「……ほんと、いてえ」

メイトの頬に、何筋もの滴がボロボロと、ボロボロと流れては、胡坐を掻いた股に落ちていく。

思い出すほどに色濃く二人の心に積もった母との思い出。優しく二人に笑い掛け、厳しく二人に木刀を振るい、明るく愛してくれた義理の母。

本当の親との思い出が殆ど無い二人にとって、ディルティーは紛う事無き、義理ではなく本心の母親。

孤児院に入った時から、幼心にも絶望の気配を知り、明るく振る舞うも心の底では諦めていた親の愛。

止めようなく流れ落ちる二人の涙はその愛の重さを如実に語る。

それは昼前になっても止む事はなかった。

だが、時は無情にも二人の涙を枯れ果てさせ、時は無情にも二人の空腹を煽る。

二人とも、昨日の昼飯から丸一日、何も食べていないのだから当然といえば当然である。

「……………」

「……………」

無言で食卓を挟むランジリーとメイト。

一メートル四方の机上には丸パン、ミルク、大金。

「何……これ」

泣き過ぎで掠れた声のランジリーが、気怠そうに頬杖を突いてメイトに聞いた。

「これ、一緒にあった」

普段通り、だがそこはかとなし沈んだ調子でランジリーに一枚の便箋を手渡す。

受け取ったランジリーは、眼に垂れかかる揉みくしゃの赤髪を左右に払い、目を落とした。紙には手書きながらも整った綺麗な明朝体でこう書かれていた。

——お玉で倒せるお手軽な、私の子供達へ。

本当はもつと真つ当な別れをしたかったんですが、このような形になってしまい、私は貴方達の母親失格ですね。

自惚れの多い愛娘ランジリー、剣の腕は振るわれる度、私に才能の片鱗を見せてくれました。でも、調子乗り過ぎ？はあと？。どんなに溢れる才能を持つとも、研鑽を積まなければ腐ります、ええそれはもうアツサリと。貴方は私に付いて来てくれると言いましたね、でも、そんな雑魚はお母さんには要りません。貴方はもつと強くなって、もつと綺麗になって、もつと魅力的になれると、母さんは信じています。だから、連れてはいけませんでした。分かってくれるよね。

優しさ溢れる自慢の息子メイト、色々と成長期の貴方の成長は剣の腕のみならず、本当に多種多様なものに溢れていました。毎朝、さり気無くランジリーの分まで木刀を磨いていたのを私は知っています。毎昼、見えないように外庭の手入れをしていたことも、毎晩、厳しい稽古の後、ランジリーが寝てからも一人で素振りをしていたのも知っています。昨日、本当は付いて行くと聞いたかった貴方の

気持ちも分かっています。自分で迷惑になると判断していたのですね、確かに昨日の話では駄目でしたが、もう少し自分の我儘を押し付けてくれた方が母さんは嬉しく思います。これからの長い人生、決してその優しい心で我を押し殺すことなく、生きていくように。

本当は口で言いたかったし、文を書くのは苦手なので全く書き切れていないのですが、まあ、私の伝えたいことは一つです。

愛しています。また、会いましょう。

PS 机の上に当面の資金を置いておきました。ただ生きるだけならば、二人で五年位は軽く保つはずです。自分のなりたいものを見付け、それで安定した収入を得れるまで使ってあげてください。無駄遣いしちゃ滅ッだぞ？

「何が滅ッ、よ」

読み終えたランジリーは手紙を、パンの乗った皿を置くスペースが見付からなかった程に紙幣や硬貨の敷き詰められた卓上に置いた紙には真新しい染みが新しく出来ていたが、メイトはそれに気付かないふりをして、

「このお金、全部騎士団からの報酬……だよな。こんなにいらないうつの」

とランジリーに話を振るも、「だね」と短く返されて二の句が継げず、微妙な沈黙が食卓を支配した。

お互いに気まずく思う沈黙、二人の手は自然とパンへと伸びた。乾いた喉をミルクで潤し、パンを千切って口に運び、もそもそと咀嚼して飲み込む。

単調な、食事と言えるかすら微妙な作業。二人の脳には昨日までの楽しい食卓の記憶が反芻される。

「今年、不作らしいよ。ユーシア村」

ふと、ミルクの潤いで少し色の戻った声で、急に麓の村の話を持ちかけるランジリー。メイトは目線だけを話し手に向ける。

「不作、いや大凶作も良いところしい。大変だね農家って。このパ

ンも作るの大変になつてゐるらしいよ」

「うん」

「でね、もしメイトが良いなら……どうせこんなに使わないし、このお金——」

——ランジリーの言葉の続きは、蹴破るように開け放たれた扉から流れ込む、大量の足音に掻き消された。

*

鋭い金属の摩擦音が鳴り響く。

空を舞い踊るランジリーの赤毛は、激しい風圧に流される。

「やっと、その気になったのか」

「ああ」

メイトの白刃は、振り上げられた戦斧によつて阻まれたのだ。

刃と刃が擦れ合う瞬間に起こった火花。それが燃え尽きて消えるのと同時にメイトは数歩後ろに飛び退いた。

「後悔するよ、メイト」

「誰に言つてゐるんだ？ 溢れる才能を持つ姉貴様？」

それまでの男勝りな口調とは違つ、仄かの女性の質を含んだ語尾にメイトは思わず口角を上げた。それはまるで遊び相手を見つけた子供みたいな、苦勞して仕掛けた悪戯に誰かが引つ掛かつたのを見たときのような微笑^{びしょう}。

「アタイは、ユーシアの糞つたれどもを許さない。一生掛けて後悔させてやる。そして、逃げたお前も許さない。殺す」

「……一方的な復讐が実を結んだ結果が姉弟の対決、か」

「うるさいウルサイ煩い五月蠅い！！ 尻尾を巻いて逃げたお前もその原因の一つだろ！」

哀れむ瞳を向けるメイトに、ランジリーは走つた。……違つ、跳躍した。

「痺れはもう良いのかよ！」

舌打ちをしたメイトは迎撃するために中段に剣を構え直す。

だが、それよりもランジリーは早かった。戦斧ではなく木の棒でも持っているかの如き疾駆。戦斧の基本形である縦斬りがメイトに襲い掛かる。

「ッゲ！」

グイン、という鉄が撓^{しな}る音。カウンターを諦めたメイトは剣を上
に構え、峯を片手の平で支える堅牢な防御の姿勢を取ったが、一撃
で腕の芯にまで振動が伝わり、骨が悲鳴をあげる。ランジリーの全
体重がかけられた一閃に、メイトの革靴が地面にめり込む。

「っ……！ おうらあ！」

メイトにしては似合わない、喉の奥から野太い声を出して戦斧ごと
とランジリーを振り払う。

「甘いよ、ついでに斬り付けも加えるくらいしないと」

左に飛ばされた体の体勢を即座に立て直し、ランジリーは戦斧ごと
と体を廻す、遠心力を最大限に活用した斬撃を放つ。

「真っ二つにする気かよ」

自分の胴体が下半身とサヨナラをする図を思い浮かべたメイトは
それをしゃがんで避ける。頭頂の髪の毛が何本かが、その豪風に引
き裂かれた。

「禿たらどうすんだよ！」

怒声を上げたメイトはランジリーの足目掛けて横薙ぎに剣を振る
う。

「よっ」

その攻撃を、斧を投げ捨てる事で身軽になったランジリーが縄跳
びの要領で小さくジャンプして回避。重々しい音を鳴らして地面を
ザックリと削る戦斧。

「なに！？」

武器の放棄に呆気を取られるメイト。その右頬に、まだ宙に足の
付いていないランジリーの蹴りが叩き込まれた。

何とか右腕でガードしたメイトは再び剣を一閃。無理な体勢から

やけくそ気味に放たれた刃は僅かに届かず、虚空を斬る。

「吹っ飛べこんちくしょー！」

掬い上げ、掬い上げ、吹っ飛ばす。

地面に対して垂直に上がる爪先に顎を蹴り上げられたメイトは声にもならない呻きを上げて再び掌底の時と同様、地面を転がる。

「はい、意識が飛んでゲームセット。見事姉は弟に勝ち……」

振り上げた足を両腕で抱え込む蹴りの姿勢を解いたランジリーは全く動く気配のないメイトに向かって言い、投げ捨てた戦斧に歩み寄り、ゆつくりとした動作で地面から引き抜く。

そしてメイトの元へ、無防備に戦斧を引き摺りながら近付く。

決着か。

「姉に勝てると調子に乗ったその弟を……殺すのでした」

「おや、メイトさんが倒れてますね」

「ッ——！ 誰だ！？」

自分以外に誰も居ないと思っていた所に現れた、自記憶に無い落ち着いた物腰の高くもなく低いもない声に驚き、ランジリーは勢いよく戦斧を構えつつ振り向いた。

「ああ、すみません。良い所を邪魔してしまつて。私はVF（ヴァーメールフルーツ）独立軍所属現大尉のイオス＝サビルークと申します」

「メイトの味方……か」

慇懃な態度で名乗る軍服姿のイオスを見て警戒心を上げるランジリー。

「どうする？ いや、聞くのもおかしいくらい当たり前だろうけど、メイトを助ける？」

ランジリーは戦斧を握る手の力を強めて、相手の強さを見極めようとする。

——階級は大尉か……、疲れてるけどいけない事も無さそうだな。イオスを見てそう判断し、よく見ても分からない程に微々、少しずつ距離を詰める。

「いいえ？ 助けませんよ？」

「へっ？」

予想外過ぎる答えに、ランジリーは拍子抜けして戦斧を落としそうになるが何とか堪えた。

「見た所、浅からぬ因縁があるみたいですし……何より、手を出したら後で私が殺されかねません」

「い……良いのか？ もうこいつに意識は無いんだぞ？」

思わず、弟であるメイトの友好関係を不安に思うランジリーはイオスに問い掛けた。

「貴方は彼の修業を知りませんかねえ」

「修業……？」

「ええ、独立軍に入ってから彼は……まあとある変な師匠を付けて修業しているんですよ」

「……？」

——師匠と修業に、この状況と何の関係があるんだ？

ランジリーは思考するも、完全に意識を失っている状況からの打開なんて思いも付かない。

「ぶえつくしよおおい！」

大きなクシャミをし、でろーん、と鼻水を鼻から垂らしたラソキラは手近にあったティッシュで豪快に鼻をかむ。鼻をかむ度に、竜翼が背筋から一直線に張られるのが何とも愛らしいようでもある。

「ふむ、風邪かね？」

「うーむ、わっちは風邪なぞひいたこともないのじゃが」

脚の低い木製の木彫り机の上に置かれたオセロ盤、圧倒的に黒が有利な状況だ。

ラソキララの向かいに座るガレウスが珍しい物を見るようにラソキララに聞くが、当のラソキララも首を傾げる。

「せめて儂かわつちか、一人称を統一させませんか……？ っと」

「迷い中じやのーっと」

ガレウスが白のパネルを置くのとはほぼ同時に、ラソキララは黒を置いた。

「……意味の分からない奴」

結局、ランジリーは答えの出せないまま、気に留めずにメイトへと向き直った。

——気絶したら終わりだろう。

ランジリーはメイトの前に立ち、戦斧を振り上げた。
血が噴き出す。

「なっ……んだって？」

ランジリーの剥き出しの腹部……寸前、メイトの手の動きに無意識的に体を反応させて後ろに身を反らせたランジリーだったが、引ききれなかったそこへ薄く剣が這った。

第一章 第八話 決着の其

皮膚が避け、最初の一吹きだけ爽快に、後にちろちろと血が垂れる。

痛みよりも驚愕に思考を占領されたランジリーは思わず後ろに飛ぶ。

まるで腕だけ別の生き物のように剣を振り抜いた後、再び腕は地面に力無く落ちる。

「死んだふりなんて……姑息な手を使うようになったなメイト」

ランジリーは不愉快に顔を顰め、腹から垂れる血を手で平で拭き、ひらひらと手を振って血を落とす。

傷の浅さが幸いしてそれ以上はあまり血が出そうにはない。

「……」

「ああ？ まだ続ける気？ 何回も同じ手には……」

「本当に彼は気を失っていますよ」

何も語らないメイトに戦斧を構えて物差しのように伸ばして攻撃範囲を測るランジリーに、ログハウスの柱に腕組みをして寄り掛かるイオスが口を利く。

「はあ……？ それなら何でアタイに斬りかけられるっていうのさ」

「んー、生存本能ってやつでしょうか？ それも獣以上の」

「生存……本能？」

「ええ、竜に恐れる人間が造り出した生への執念……といえば聞こえも良いでしょうが。ただ敵意にだけ反応して無意識に腕を振っているだけです」

ハハハハハ、と乾いた声で笑うイオス。

——そんな事が出来るはずが、やっぱり死んだふりしか……でも。

現実的ではない話、そんな事を素直に信じる者なんて居ないだろう。だが、メイトと共に稽古を積み、母の誇りを受け継いだ弟とい

うのを考え始めると話は別になる。

「ん……ああ………くそ」

俯せのメイトから苦しいげな呻きが漏れた。

「また、氣い失いかけてたか」

地面に震える腕を突き立ててゆつくりと体を起こすメイト。

視界がぼやけるのか、頭をぶんぶんと左右に振る。

「いいえ、がつつり氣絶してましたよメイトさん」

「……イオス？」

明朗に突っ込みを入れるイオスの存在に氣が付いたメイトは、すぐ隣に転がっていた愛剣を掴み、不機嫌そうに眉根を寄せ、視線をイオスに流す。

「氣絶してただとお？ ……なら何で死んでないんだよ、馬鹿かお前は」

「馬鹿とは心外ですね、事実を言っただけですが。それよりも戦闘中じゃないんですか？」

「うおっ！」

すっかりランジリーの存在を失念してイオスに噛み付いていたメイトの瞳が、寸前の所でランジリーの横薙ぎの戦斧を捉え、それを躲す。

「ん？ イオス、お前まさか手え出したんじゃないだろうな」

「はい？」

「何で姉貴の腹がかつ裂かれてるんだよ！」

「私は何もしていませんよ」

ふらつく足でなんとか後方に下がって距離を取ったメイトは再びイオスに睨みかかる。

「絶対に何があっても手を出すな、絶対だぞ」

「それはもう、心得ていますよ」

人差し指を真っ直ぐに突出して念押しをするメイトに、イオスはやれやれと首を振って溜息。

「お前……、本当に氣絶してたのか」

「はあ？ だから、してたら姉貴は殺してるだろ、何言ってるんだよ」

衝撃の事実を目を丸めるランジリー。

しかし、メイトは理解出来ずに剣を右手で上段に構えつつ、「いや、してねえよ」と答える。

「あはははは、そうかそうか。なあ、メイト」

「何だ」

「そろそろ、終わりにしようか」

遊んでいると暗くなってきたから今日はそろそろお開きにしよう、といったニュアンスにも感じ取れる軽い流れ。

メイトは一瞬間を置き、言った。

「そうだな」

ランジリーとメイトの纏う気配が瞬時に色を変える。

それまでの戦闘が、まるで準備体操か何かだと言わんばかりの闘気。

息を吸う隙すら惜しむ、一触即発のそれ。

「マジニフェント——」

戦斧を一旦地面に突き刺し、自分の豊満な体付きを抱きしめて蹲るように体を丸くするランジリー。

赤い瞳が、鮮血を塗りたくったように更に紅く……口から洩れる吐息は何かを我慢しているように固い。

「——インストオオオオル！！」

空気が、重力が何倍にも膨れ上がったかのような錯覚。

ランジリーは指の関節をバキバキと鳴らし、大きく手足を広げた。火山の噴火、隕石の落下……それら全てを形容できる圧倒的な威圧感。

メイトの髪を、肌を刺す様な空気が撫で抜ける。

魔力と思われる朱い、湯気も見えるものがランジリーの全身から噴き出している。

「蘭華A」

そんな嵐の奔流を思わせる中、清流を彷彿とさせられる静かで落ち着いた声色で呟いたメイトが剣を自身の目の前で横に構え、刀身の上をスーッと指でなぞる。

——ジジッ……ジジジジジジジッ。

指が通った軌跡に、青白い光。

振り下ろされた剣は、もはや剣ではない何か。

茶色い柄から延びるのは、まさに圧縮された雷いかずちそのものであり、妖艶に輝く刃はあまりにも眩く、抑えきれない電圧は威力を誇示するかのように刀身の線上を進る。

無言で、地面から戦斧を引き抜いたランジリーの姿が忽然と、消える。

「ック」

メイトは横に飛び退き、同時に雷剣で元居た場所を薙ぐ。
赤い閃光と青の閃光が弾け合う。

「ふーん、見えるのか」

「ああ、ギリギリなんとかな」

「成長したな」

ランジリーは片手で持ち上げる戦斧の柄でガードした雷剣を瞬時に払い除けた。

僅かに鼻腔をくすくす撥る、焦げた匂い。

柄から手へと這った雷がランジリーの皮膚を焼いたのだ。

長く触れていれば焼き殺される、ランジリーは雷剣の脅威を肌で感じ取った。

「ラアアア！」

いつの間にか振り上げられて、瞬く間に振り下ろされる戦斧。戦斧がまるで重さの無い紙切れの如く連続で地面へと叩き付けられ、以前とは比べ物にならない程に土を深く抉り取る。悲鳴を上げる戦斧。

その狂気の全てを紙一重で避けるメイト、隙を見て反撃したいところだが大振りなのに隙は皆無、避ける事しか出来ない。喰らうと

酷使に耐え切れなかったのか、はたまた主人の後を追ったのかは分からないが、もう使い物にはならない。

しかし、主人はまだ生きているのだが。

「……なんて、残念外れ」

「だろうと思ったよ」

メイトの体は、バネ、ゴミ屑のように弾け飛ぶ。

それはそれは豪快に、土埃を巻き上げるだけ巻き上げ、水切り石の如く地面を水平に転がっては飛び、ログハウスの端の脚柱に激突して、ようやく止まった。

ランジリーは脇に挟み込まれた雷剣を手取る。

どうやら直接メイトが魔力を送り続けていたらしい雷剣の煌めきは時間が経つ毎に弱まり、暫くするとただの剣の色へと戻った。

左の二の腕と胸回りが黒く焦げているランジリーはそこを優しく擦る、どうやら内部まではまだ壊死していないらしく肌がぼろぼろと剥がれ落ちたりはしない。

「はぁ……」

精根尽きた様子のランジリーからは朱い魔力の噴出が収まり、瞳の色も元の赤に戻る。

途端に力が抜けたように足を折って倒れかけるが、剣を地面に突き刺す事でなんとか踏ん張り、メイトの元へと歩み寄る。

「カハッ、ゲホッゲホッ」

メイトは腹を抱え込んで咳き込んだ。吐血、土色が瞬く間に赤黒く染まる。

意識は有り、眼も開いてはいるがとても戦える状況では無さそうだ。にも関わらず、柱に手を伸ばし、すがる。足を奮い立たせて寄り掛かりながらも、その場に立ち上がった。

眼の色は死んでいない、飽くまで戦いを続行するという意思が宿っている。

「どうした姉貴、あの技はまだ未完成なのか？ 勝負を急ぐなんてらしくないじゃないか、ふらふらだぞ、手を貸そうか」

余裕の無い笑みを浮かべて減らず口を叩くメイト。

「いつの間にか電気マッサージでも受けてたのかな、若干眠たいよ」
同じく死々累々の様子で剣を杖代わりにし、ランジリーはメイトに笑い掛けた。

お互い、武器なんて使わずとも一発小突かれるだけで倒れてしま
いそうな程衰弱しているのが分かる。

「剣を握るのなんて久しぶりだけど、やっぱり馴染むなあ」

「欲しけりややるよ、二年使い続けた俺の相棒で切れ味も良いぞ。
特に、死にかけのやつを斬るのなんて造作も無い」

「あー、良いね。せつかく弟からプレゼント貰ったんだし、早速試
し切りでもするかな」

「……蘭、華P」

メイトの両拳の甲を覆うように、青く薄い電気の壁が出現した。
しかしそれは余りにも魔法としての体裁を整えていないおぼろげな
もので、今にも消えそうである。

決着真近、誰の目から見ても明らか。

そして最初に動いたのは、メイトだった。

重くスピード感の無い足取り、だがメイトは悲鳴を上げる足腰に
鞭を打って走る。

「拳闘なんて出来るのか？」

「出来るさ、毎日見てるからな」

「馬鹿だな、拳闘のことはそこまで詳しくないけど——」

ランキララの顔が一瞬だけ浮かび、口元に薄い自嘲を浮かべつつ
メイトは直進する。

「左右の揺さぶりつてのは必要ないのか？」

走るだけが精一杯であるメイトに対しては無理な注文。

距離一寸、ランジリーの突きがメイトの顔面に向かって放たれた。
甲の蘭華で払う。半物質となった雷は剣に牙を迸らせつつ剣を弾
こうとするも、淡い魔法はそれを拒みきれはしなかった。

「ッグ……ア」

花が蹴散らされるように、蘭華の障壁は剣に貫かれて粉々に粉碎された。

左手の甲から腕の関節にかけて溢れ出す鮮血。

深く深くメイトの肉を抉る剣は、止め処無く吹き出す主人の血を刀身に塗りたくる。

「やっぱ、耐電性の剣だよな」

ランジリーは更に二発、三発とメイトの体を斬り付ける。

一方的な暴力。

躲そうとするも体力がもう無いメイトはそれを何とかズラす事しか出来ない。

太腿、頬、肩口から脇腹にかけて大きく斬り抜かれる。

「悪く思ふなよメイト、アタイに勝てるはずなんてないのに……思い上がって此処に来たお前が悪い」

体中の至る所から流れ出る血、直前で身を引くなどの対処をしていたメイトも、激闘の疲れ、出血の多さ、ダメージの大きさ……、そして最後に左肩口を剣に貫かれて遂に足を折った。

第一章 第九話 炸裂、そして縛りましょう

呻きを上げる余力も、顔を上げる力さえ残っていない様子のメイトは倒れ込む事だけを拒否するように膝を地面に屈し、力無く両腕を垂らす。

呼吸の音すら、聞こえてはこない。

「そのメイトの仲間、本当に手を出さないつもりか？」

メイトの肩から剣を引き抜いたランジリーは木の壁に寄り掛かるイオスに尋ねる。

肩から勢いよく血が流れ出す。

「そうですねえ、自分で言ったことを覆すような友人を持った覚えはありませんので」

「……さいか」

イオスは屈託のない笑みをランジリーに向けて言った。

ランジリーも特に何も言うつもりは無いらしく、無表情でメイトを見下ろす。

「お母さん、ごめんね」

血塗れた剣が振り上げられる。

伝う滴がランジリーの手を、頬を流れるもランジリーは拭わない。生きているかも分からない母への懺悔、さながら頬に流れる血が涙の様にも見える。

「ま……だ………、終わ………って、ねえ………ぞ」

掠れた声、上唇だけを動かして言ったメイトは右拳で地面を弱弱しく叩く、叩く。

そして、続いて太腿に拳を叩き付ける。血が振動でピュッピュッという音を立てて噴き出す。

「終わりだよ、もう」

メイトを突き動かすひとつの思いが、立つはずもない足を奮い立たせる。

吹き出す血の量は少なく、限界をとくに通り越しているメイトの体。

静かな言葉と共に、ランジリーは剣を振り下ろした。

「うおおお…………… おおおおおおおおおお！！！」

メイトの振り絞られる闘志、風を斬る刃。

何をするにしても、もう間に合いはしない。

気力を尽くし立ち上がったメイトに、ランジリーは驚くでもなく急くでもなく、ただ、これまでにない優しく、柔らかい微笑みを。

姉が頑張る弟を暖かく見守る、愛の溢れた眼差しを。

「やっぱり、無理だったよ…………… お母さん」

ランジリーの腹に刺さる右拳、片割れの蘭華。

魔法は弾け、青い蘭、花咲き、舞い踊る。

突き出したメイトの甲から溢れ出す青白い花卉の吹雪が、二人を包み込んだ。

「さて、どうしましょうか」

かくして、たった一人その場に立つイオスが折り重なって仲良く倒れ込むメイトとランジリーの姿を見て苦笑いを浮かべる。

「ん？ そういえば何か忘れているような」

爽快な初夏のそよ風がイオスの髪で遊んでいく。

「何でしたっけ、まあ取り敢えず手当てが先ですかね」

喉まで出かかっているといった様子だったイオスだったが、考える事を止めてもたれ掛かっていた木の壁から腰を浮かし、瀕死の重傷である二人へ歩く。

「まったく、作戦と随分違う動きですねメイトさん？ よっと」

イオスは返事を寄越さないメイトを重そうに肩に担ぎ上げ、地面に深く突き刺さったメイトの剣を引き抜き、血が付くのも構わずに軍服のベルトに差し込んだ。

「勝者、ランジリー＝ヴァルター」

「はあ……はあ……」

——弾は後、一二発……鉛を入れれば五〇発だけど、それじゃ作戦の意味を成さない。

木々生い茂る森の中、梢に背を預けて座り込むコリーは舌打ちをした。

「まともによっても勝てるか分からないのに、本当に無茶な悪作です」

溜息を吐きながら最後のゴム弾達を装填した二丁拳銃の弾倉を閉じるコリー。

ざわめく枝葉の音色、小鳥たちの囀りは聞こえるも何処かに居るはずのマクリーの気配は感じ取れない。

突如、森に響く爆発と悲鳴。

——来た！

コリーは左後方からのそれに向かい、拳銃だけを樹木から突き出して一発撃ち込む。

「けほっ、けほっ！ やっぱりあの魔術師さん何か仕掛けてたなあ！」

——外した。

脇を通り抜けたゴム弾を気にも留めずに、煤^{すす}だらけのマクリーが怒ったように地面を踏み、火の粉が燃え移った麻の服を脱ぎ捨てて即座に茂みに体を飛び込ませてコリーの視界から失せる。

くさりかたひら
「鎖帷子……」

細い鎖状の鉄を編み込んで作られた薄手の鎧姿になったマクリーを見たコリーは、ぽつりと呟いた。

「ゴム弾なんて通らない」

見た目以上の防御力を持つ鎖帷子に頭を抱えるコリー。

場所まではバれていないと信じ、その場で息を殺す。

心臓の鼓動さえ邪魔に感じる潜伏戦闘、ただ座っているだけでも

緊張に精神は削り取られ、コリーの頬を嫌な汗が伝う。

最小限にしているはずの呼吸音、それが小さいのか大きいのかすら不安なコリーは唇に拳銃を押し付けて更なる消音を心掛ける。

二人が、大将戦の決着をイオスに知らされるのはこの息の詰まる戦いを後小一時間継続させ、太陽がすっかり南中してしまう頃だった。

「んあ……？——イツツ」

「ああ、まだ傷を回復させきつてはいないので動かない方が良いでしょう」

木の温もり溢れるログハウスの二階の一室、メイトが侵入の為に空けた穴がある窓から心地良い風が吹き込んでくる。

目を覚ましたメイトは苦渋に満ちた顔をして、聞こえてきたイオスの言う通りに動かず横になり続ける。

風穴の開いたメイトの肩口には赤黒く己を染める包帯が巻き付けられており、その上から緑色の優しい光を放つイオスの手が乗せられている。

「どう、なった」

「先に貴方のお姉さんの傷を癒して他の山賊さん達と一緒に、下のフロアで縄を使って縛りつけてますよ。お姉さんが先程目を覚ましたと、コリーさんから連絡がありました」

「そうか」

「はい、回復終わりましたよ。ただ完全には治癒していないので、激しい動きをするとポックリいっちゃいます。後は本部に戻ってから本職の方にしてもらって下さい。後、血がかなり流れているので早めに何か食べるべきですね」

「ああ、分かった。ありがとな」

「いえいえ」

メイトは礼を言い、体を起こして横に畳まれていた軍服に手を伸

ばす。

血が染み込んだ軍服はずっしりと重く、戦いの激しさを物語っていた。

——夢中で、何も考えてなかったな。

先の戦いが蘇る。圧倒的な実力差、抗いようのない姉に恐怖を覚えていた自分がなんとも情けない。

「行く前に渡したアレ、無くさずにまだ持ってるか？」

「ええ、もちろん」

「サンキューな……、行くか」

流石に血生臭いそれを着るのには躊躇いが生まれ、そつと元の場所に着いた。

「おい、これどんな縛り方だよ」

部屋割り等は無く、全体が広いロビーとなっているログハウスの一階。

大量の机や椅子は壁際に寄せられ、真ん中で仲間と縛られるランジリーが不満そうに唇を尖らせて言った。

「いやいやお姉さま、私もなかなかエロいですよーう」

マクリーも同様にケラケラと笑いながら言う。

ログハウスの丁度中心部、広く空間が確保されているそこにランジリーとマクリーを始めとした山賊達三十余名が縛り上げられていた。

まだ目を覚まさずにぐったりとしたままの者も居るが、息をしているため死んではない。全員が全員個別に縛られ、縄の縛り方も様々である。

「マクリーって意外と乳あつ——」

灰色髪で少し老け気味の青年が言葉の途中で意識を失った。

隣に座っていたマクリーのヘッドバットをもろに鼻に受けたのだ。そんなマクリーの縛り方は亀甲縛り。腕は背中位置で縛られ、

そのまま結びと結びの隙間をひし形になるようにクロスさせ、最後に胸が突き出るように谷間に縄を持っていき縛るといしょかつう諸葛工口結びである。鎖帷子が体のラインを際立たせ妖艶な様に仕上げている。一方ランジリーは一見すると普通に縛られているように見える。だが、両足両手を背中の後ろで一括り縛られており、身動き一つ出来ない且つ股が大きく開かれるという扇情的なシンプル・エロス。

「という縛り方を施していたのですが、終わってからコリーさんに殴られてしまったのでただ単に手を後ろで縛るだけにしました」

「イオスさんはそんな人じゃないと思っていたのに、不潔です」

「いえいえ、普通はそんな感じですよ？ メイトさん」

「お、俺に話を振るな！」

「ムツツリですねえ」

突如、真顔で猥談を暴露したイオス。

幻想が崩れた、とショックを受けて目を手で覆うコリー。

誰にムツツリと言ったのかは定かではない、いつも通り余裕がある物腰のジョーカー。

そして、軍服を着るのを諦めて引き締まった上半身の傷口に包帯を巻き付け、軍服ズボンを履き、焦ってイオスからの同意を拒絶するメイト。

四人は簡易に縛られた山賊達の前に立つ。もちろん先頭にはランジリーが胡坐を掻いて座っており、メイトを表情無くただただ見上げている。その肌に傷や焦げ痕は見当たらない。

山賊達は押し黙るでもなく、騒ぐでもなく、これからどうなるのかを案じてひそひそと隣の者等と話合っている。

「よ、姉貴」

「よう」

メイトは健全をアピールするように、貫かれていた左肩を上げてランジリーに会釈。

縛られているランジリーはただ単に口を開いて短く返した。

ざわついていた山賊達は空気を読んで黙る。

「姉貴達、実は何もしてないんだろ？」

「……」

「ユーシア村、見たけど全く荒らされた空気は無かったからな。何度が畑から作物奪った程度じゃないのか？ 俺が独立軍に入る前と比べて、知らねえ顔は増えてたが居なくなった顔は、記憶が正しけりやだが無かった」

「……」

確信を持った表情でメイトは言うが、ランジリーは何も答えずにその顔を見詰める。

「復讐、したいのなら今すぐ全員ぶっ殺してこい」

鞘に収まった剣を引き抜き、ランジリーの後ろに回ってメイトは縛っていた縄を切り裂いた。

縄の跡が目立つ手首、グーパーグーパーと血の通いを良くしたランジリーは立ち上がり、メイトが差し出してきた剣を受け取る。

血は拭い取られ、元の銀の輝きを反射させる長剣がランジリーのぼんやりとした顔を映し出した。

「……探偵かつての」

メイトに付き返される剣。

ランジリーはメイトがそれを何も言わずに鞘に収めるのを見届けながら、語りだした。

「最初、メイトが出て行った時は本当に誰も信じられなくて、憎くて、殺してやろうかとも思った。言葉巧みに言い寄って母さんの金を雀り取ったカス共を呪ったよ。アタイ独りでも全員殺せる自信もあったしね……、でも度胸が無かった。居心地が悪くて逃げ出してこいつらに会ったんだ」

後ろを振り向くランジリーは、仲間に向けてフツと笑い掛ける。

「最初のうちは一〇人位だったけど、まあ類友ってやつかな。気付いたらこんな人数になってて気付いたら家おっ建てて山賊になって

た。ユーシアの事を話したらみんなブチ切れてさ、そのまま村を全滅させかけないくらいの勢いで武器を手にとったりと大変だったよ」「そりゃそうですねー、姉さんは私達の居場所だし、分け隔てなく接してくれた初めての人なんだから報復くらいさせて欲しかったです！」

マクリーが頬を膨らませてブーブーと愚痴るが、ランジリーがその頭を優しく撫で下ろすとすぐさま幸せな表情を浮かべて口を瞑る。「ま、それは何とか止めてさ」

「力尽くだったがな」

即座に突っ込みを入れた半獣人の男に「うるさい」と口を尖らせるランジリーは、わざとらしく咳払いをして話を続ける。

「でまあ、ユーシアから定期的に農作物やら食いもんやらを奪い取るだけって事で話が纏まったんだよ。嫌な予感はあるんだけど、まさかヴァメフに討伐を依頼されるなんて思わなかったなあ」

「あんまりだー」「やっぱり痛めつけたりするべきだったんだー」

「不公平！」「姉さんの金返せし」「横暴！」「カス」「うんち」

「ちんち——」

山賊の面々から抗議の声があがる。不満そうに、怒りに顔を歪め、面白半分に囁し立て始めるも、あまりにも不適切な言葉を言おうとした一人の男にはランジリーの鉄拳が落ちた。

「で、どうする気？ やっぱり依頼通りに私達を殺して終わるか？

まあ、回復させてもらってなんだけど……」

ランジリーは部屋の扉に歩み寄り、そこに立て掛けられてた一本の安そうな片刃の刀を手取る。

「一応リーダーとしての務めってことで、こいつ等だけは逃がすけどね」

左右にキレのある試振りを見せ、刀の峯を肩に乗せたランジリーは四人に向かって不敵に舌を唇から出した。

第一章 終話 快晴なり

「メイトさんの二年分の貯金が全部消えましたね」

「ああ、ほんと不景気には痛い出費だった」

昼下がりの森の中、踏み固められて草の生えていない畦道あぜみちを四つの軍服が進む。

「少しだけ、メイト中尉の事を見直しました」

コリーが珍しく、水で濡れて生乾きの軍服を纏うメイトを尊敬の眼差しで見詰める。

恥ずかしさに頬を染めるメイトは「ふんっ」と鼻息を鳴らすだけでそれに応じた。

「最後、お姉さんに渡したビリユキルモの種、今の相場では確か一粒1万マルーでしたっけ」

「良く知ってるなジョーカー」

「そりやあもう、野原のダイヤモンド、結婚式では指輪の代わりに渡されたりするほどの高価なものですしねえ。女性の憧れですよ」

恍惚な表情で大袈裟に手を合わせるジョーカーを見て三人はクスクスと笑う。

「一粒が開花する可能性は約1%以下。育てるのは大変難しく蕾の状態ですら一本30万マルー、花が咲こうものなら一本150万マルーで取引されるような物……そんな種を計三百粒も無償で渡すなんて、もう泣けてくる程の姉弟愛ですねメイトさん」

「馬鹿野郎、そんなんじゃないよ」

「ユーシアの奴等と一緒に頑張って育てるんだな……その代わり、俺の剣は返してもらっぜ？　なーんて、痺れまくっちゃいますよメイト中尉い」

「う、うるせえ！」

メイトの声の真似をしながら腕にまとわりついてきたジョーカーを、満更でもなさそうな表情をしつつ振り払ったメイトは少しだけ

歩くスピードを上げた。

「ユーシアの村長さん、メイト中尉にわざわざ依頼したのももしかしたらこうなるって見越していたんじゃないですか？ それにほら、最後渡そうとしてきた大金、そっくりそのままではないにしろ、中尉達のお母さんの――」

「さあな、今さら戻って聞くのは面倒だし、知らねえままでいいだろ。依頼も討伐はしてねえし、半分だけで十分だ」

「歳の甲は侮れませんね」

コリー、イオス、少し遅れてジョーカーは灌漑深く頷きながらメイトの隣へと追いつく。

「たださ」

「――ただ？」「――」

メイトが空を見上げるのに倣い、三人も上へと目を遣る。

「母さんが返ってきたとき、悲しい顔されると俺が親不孝者みたいだろ」

晴れ渡った空、雲が疎らに散らばる快晴の下、四人は独立軍本部を目指して歩き続けた。

プロローグ 正義の騎士団

「悪しきは滅し、怪しきは斬り、ただ純粹たる善のみを残せ……か」
銀色の軽装の鎧を身に纏う青年は、曇天の空を仰ぎながら言った。
長い明金の前髪は黒のヘアピンで上に留められており、金の瞳は無機質な光を宿している。

「どうかしましたか、クラド隊長」

「いや」

何かに座っているクラドと呼ばれた青年の隣に立っていた、明らかに青年より年上の鎧姿の男が訪ねる。

その男、いや周りの数十人に渡る騎士達に比べると、青年の鎧の薄さが際立つ。

肩から胸回り、手甲、腰回り、膝から爪先を守る厚さ一センチ程のプレート、余す所は鎖を編み込んだ黒アンダー……、鎧として機能するか実に微妙な防御性能の軽鎧である。

「朱雀はどうした」

「副隊長は現在、隊員五名を連れて残党を殲滅しています！」

クラドと呼ばれた青年の問いに、別の男が応えた。

「そうか、じゃあ僕達も行こう。人数は多い方が犠牲が出なくて済む」

クラドは立ち上がり、周りの者にそう告げた。

バキヤ、という西瓜を叩き割ったような嫌な音がクラドを取り巻く騎士達の耳に響いた。

クラドのレギンス（膝当て）に、大量に吹き出した赤が飛沫する。だが、何を踏んだのか、クラドは確かめようともしず歩き始めた。

『はい！』

十数名の騎士達が一斉に声を張って返答し、歩き始めた。中には若干だが女性の声もあったが、すぐに『バキヤッグシュッグチャッ』という耳障りな歪音と行進の足音が他の音源を全てを掻き消し――

——騎士達が去った後に残ったのは、廃墟建ち並ぶ不毛の町に広がる、紅く染まる大地だけだった。

「——偽善無き純粹たる正義……、それが法というものだ」

第二章 一話 竜と十

石造りのとある一室、ちよつとした宴会なら余裕を持つて開けるであらう場所に、多種多様な防具や武器を装備した者達が集結していた。

その数は五〇を超えており、男女の割合は八：二程度。ちらほらと半獣人や末天人の姿も見えるが、圧倒的に人間の方が多い。

一見バーの様にも見受けられるが部屋の左面にあるカウンターに店主らしき人物は居らず、棚に並べられた紫色の果実酒の瓶やオレンジジュースの瓶等を皆好き好きに手に取り、部屋に備え付けられている何十組かの丸机の上に置いて楽しげにそれぞれの談話を繰り広げている。

「クラド隊長」

そんな賑やかな部屋の片隅、オレンジジュースの瓶とそれを注いだ二つのグラスが載った机に二人の末天人が腰掛けていた。

その片方は綺麗な銀色の軽鎧を身に纏い、金髪を黒いヘアピンで留め、左右の髪を貫くように上に向かう尖耳を持つ騎士、クラドである。

「どうかしたか、もしかして……もう次の仕事でも入ったのか？」

朱雀

「いえ、そうでは有りません」

クラドの向かいに座る、彼と同じく二十歳前後の女性が赤い長髪を揺らしながら静かに首を振った。垂れ耳の朱雀と呼ばれた女は、鎧ではなく、厚手でボタンの多い慇懃な黒い制服を着ている。室内には帆かに五・六人程同じ服装の者が居り、全員腰や背中銃器を装備しているものの、朱雀は特に何かを持っている様子は無い。やや丈が長めに誂えられた上着に半分くらい隠れているズボンという

のは見ていて若干暑苦しくも感じる。

「最近の騎士団……いえ、帝国は少し暴力的では有りませんか？」

声量を抑える朱雀の意思の強そうな紅蓮の瞳が真っ直ぐとクラウドを射抜く。

しかし、クラウドは何食わぬ涼しい顔でそれを返す。

「珍しいな、お前が帝国に対して不信を抱くなんて」

「不信、というものではありません。ただ、少し何かを焦っているような感じがするだけです」

「仮に何かを焦っていたとしても、それが結果的に善の支えになるなら僕は構わない」

「一昨日、廃墟に溜まっていたならず者達が、実際にはまだ何も事を起こしてなかったとしてもですか？」

朱雀の少しだけ語尾が強まった言葉を聞いたクラウドは、話を一旦中断するかの様にオレンジジュースが入ったグラスに手を伸ばし、それを飲んだ。

半分くらい入っていたそれは一気に飲み干され、中に入っていた少量の氷が互いにぶつかり合ってカランと小さく二人の耳に響く。

「それが義の為なら、な」

「それでもっ——」

クラウドの言葉に異を唱えようと朱雀が立ち上がったのと同時に、ボタンと大きな音を立てて勢い良く部屋の扉が開いた。

室内に居る全員の視線はそこへ集まり、そしてそこに立つ者を見た瞬間、誰もが息を飲んだ。

「十番隊隊長、クラウド」チビィ並びに副隊長、合間館　朱雀は此処に居ますね？」

清涼の中に含まれる威圧を感じさせる静かな物言い、首筋を覆うように伸びる白髪と猫の様な金色の瞳。周りの騎士や銃士とは違い、防御もへったくれもない普通の黒のワンピースを纏っている。

しかし、人々の畏怖を招いているのはそんなものではなく、背中に生えている竜を思わせる立派な翼であった。鋭利な翼爪に黄土色

の表皮の内側に張り付く緑の翼膜の生々しさが、それが模造の類で無い事を訴えている。

「御呼びですかね、一番隊隊長ラバレル」ソクラス「キルディア」ライン「ラハールさん」

「お勤めご苦労様です」

人込みを掻き分けて、クラドと朱雀がラバレルの前に立った。

朱雀はラバレルよりも長身であるが、クラドは同じ位であり、傍から見ると保護者と子供の様にも捉える事が出来そうだ。

「用件は二つあります。一つは十番隊が過度に摂取している酒類の超過予算について」

ラバレルの言葉を聞いた瞬間、クラドはジロリと背後に立っている自分の部下達を睨む。

騎士達はバツが悪そうに顔を反らしたり、私はオレンジジュースなので、とアピールするように瓶を掲げる者もいる。

「そしてもう一つは、次回の任務についてのお話です。詳しい内容は私も存じておりませんので、共に団長室まで来るようにとの事です」

「わざわざ隊長が来るって事は、初めての合同任務か？」

「それも含めて話されると思います」

クラドの言葉を返したラバレルは「では」と短く言って踵を返した。

話から察するところ付いて来いって意味合いだろう、とクラドは判断し、朱雀に視線を送って顎でラバレルを指す。

朱雀も同じことを考えており、何の躊躇いも無くラバレルの後を追って歩き出した。

「お前等、帰ってきたら楽しい会議をしようか」

部屋に残る者達を鋭い目付きで睨み付け、押し殺した声で呟いた後、クラドもその場を後にする。

残った隊員達は皆、紅潮した頬を一気に青褪めさせ、慌てふためいて酒瓶にコルクで栓をするのだが、それで何かが変わる訳でもな

くただただ「やっちまった」とお互いの肩を慰め合うのだった。

先行するラバレルに続き、クラドと朱雀は広い建物の廊下を迷う事無く突き進む。

全面石造りというのは火攻めの対策なのだろうか、何にせよ感覚を開けて天井に並ぶ綺麗に手入れされている電灯や曇り一つ無く昼の陽射しを城内に迎える大窓が石造りの外見と相俟って高級さを醸し出している。その窓の向こうには貧富の差が余り無さそうな治安の良い町が広がっており、三人の居る騎士団本部と同じく石造りやレンガ造りの民家が多く見受けられる。

通り過ぎる者は皆、三人の邪魔にならないように端に退くか、軽く手を挙げて会釈を交わすかの二択だ。

そんな場所を暫く歩いていると、ラバレルは一つの両開きの木扉の前で足を止めた。

「私から先に入りますが、宜しいですか？」

「ああ、気にしないでくれ」

ラバレルの社交的な言葉を軽く手をひらひらと振って応えるクラド。

言葉通りにラバレルは扉を三回だけノックし、中から「入って来て構わんぞ」という年配の男声が聞こえてくると同時に扉を押し開けた。

ボタンという大きな音が、ラバレルの「失礼します」という声を掻き消す。

「はは、もう少し静かに扉を開けられないのかね」

「力の加減が難しく、申し訳ありませんでした騎士団長」

「ああ、いや、老人の小言と聞き流してくれて良いんだ」

若干呆れ気味な声が、部屋の奥から三人に届く。

長机を挟んだ二対の革製のソファーに、部屋全体に広がるふかふ

かとした赤い絨毯。その真ん中の位置には、三角形を三つ掛け合わし中心に大きく桜という花が描かれたエンブレムが刻まれている。

「一番隊ラバレル、十番隊クラド及び朱雀参りました」

「掛けてくれ」

樹を浮き彫りした机に座る白髪の団長に向かい、三人は敬礼をした。紺碧のカーディガンを羽織り、下にスーツの様な制服を着ている老人は皺が刻まれた顔に柔らかな笑みを浮かべて手の平をソファーに向ける。

『失礼します！』

三人は入り口で老人に背筋を伸ばして敬礼をし、一番位の低い朱雀が扉を静かに閉めたのを確認してからソファーに歩み寄り、隊別に分かれる形で腰を下ろした。

「さて、あまり長々と老人の与太話をするのも忍びない。早々に本題に入って構わんかね？」

団長は机の上で手を組みながら三人に問い掛ける。

三人とも異論は無いらしく無言で応じ、団長は一呼吸置いてから言葉を続けた。

「実は先程、帝国からの使いの者が直接此処に任務を言い伝えに来てな、その任を十番隊及び一番隊隊長ラバレル君に頼みたいのだ」

「……？ 僕達十番隊と一番隊の合同任務という訳でしょうか？」

団長の言葉をクラドは疑問に思い、言葉の捉え間違えかと考え聞き直した。

「いや、十番隊は全隊員で之に当たってもらうが、同伴としてラバレル君单独にも出てもらう」

「ふむ……僕達だけでは心許ないという訳ですね。明日は確か二番隊と四番隊も任務が有るはず。六番隊は長期戦線に臨んでいる為に此処には居ない。戦闘に著しく特化した一番隊全員を動員してしまえば本部戦力が手薄になる、と」

「クラド隊長……」

余程珍しい事なのだろうか、自分達を甘く見られたと思ったクラ

ドは表情にこそ出してはいないが、言葉に明白な嫌悪を含ませて団長に投げかけた。朱雀はそんなクラドを咎めるか、それとも賛同するか迷い、結局は口を開くことなく団長にどっち付かずな視線を送る。

「いや、そうではない。ただ今回は少し異例なだけだ」

「異例、と申しますと？」

「君は、数回に渡ってヴェーメルフルーツとの義半戦闘を行った事があるね？」

義半戦闘というのは互いに正しきがある場合に特例として認められる、どちらが如何様な損害を受けてもその場限りの対立として水に流す、トクオリア大陸憲法で定められている戦闘である。

ヴァーメルフルーツという単語を耳にした瞬間、クラドの脳裏にとある黒髪の少年の姿が思い浮かぶも、クラドは小さく首を振ってそれを掻き消し、短く「はい」とだけ肯定を示した。

「実は今回の任務は義半戦闘が認められるパターンでな、出てくるのはもちろんヴァーメールの部隊なのだ」

「確かに義半戦闘が起こるかもしれないというのは任務の難易度を飛躍的に上げる事になりますが、それにラバレル隊長の同伴がどう関係するのですか？」

「……あちらからも出るのですね」

クラドの言葉に続いて口を開いたのは、ずっと黙り込んでいたラバレルだった。

「ああ、その可能性が非常に高い。なにせ任務地は君の仮の故郷でもあった末天人の村、バリアンテなのでな」

「遂に、帝国は回収を判断したのですか。しかも義半戦闘という事はバリアンテの同意が無い故に」

「その通りだ」

団長とラバレルのみで構成される会話、疑問を持っていたクラドにしては訳の分からない答えであり、当然口を挟む。

「僕にも分かりやすく言って貰いたいですね」

「ああ、すまない。任務の内容から話そう、今回君達にして貰いたいののはどの国家にも属していないバリアンテにある秘法と呼ばれるものの回収だ」

「秘法？」

「正式名称　？空？　は知っているね？」

団長の言葉に、クラウドは口元を手で覆い眉根を顰めながら言葉を紡いでいく。

「空……、確か四大増幅器の一つで……周囲の魔力源を増幅させる効果、でしたか」

「ご名答。それがバリアンテに奉られていてね、先のフォーリー戦争の間接的な引き金にもなった物だ」

「それを今更、回収すると？」

「そうだ。長年放置に近い状態であったが、戦争を境にこの大陸全体が形状とはいえ合衆国として動くことになった今、どの国が所持してても良い訳なのだが、戦争に参加していなかった我がヴァミル帝国が四大増幅器所持国になることが決まったのだ。だが――」

「確か、増幅器はそれぞれ無国籍の地域並びに部族が保有しているので如何に国家と言えども強制的な回収は出来ないはずなのでは？」

朱雀の言葉に、団長は皺寄った顔に更に苦悩の皺を寄せ、深く頷いた。

「なるほど……それほど強固な守りの無い場所に放置しておくといつ何時、不安因子に強奪されるか分からないので回収に乗り出した、と」

「その通りだクラウド君、そして予め通告を受けたバリアンテは独立軍に護衛の依頼をしたらしい」

「概要は分かりました。して、ヴァーメールとの戦闘に九割以上の勝利を収めている十番隊に何故彼女が？」

クラウドは話題を最初の質問に戻し、無表情で長机の木目を見詰めているラバレルにチラリと視線を向け、再び、苦しげな表情をする団長へと目を戻した。

その後、クラウドに言い渡された答えは彼を納得させるには十分すぎるものであり……

……彼は、今までの義半戦争とは全く違うものになると顔に冷や汗を伝わせる事になるのだった。

第二章 第二話 戦闘戦闘、戦闘

「生意気な餓鬼だったよ」

鬱蒼と伸びる木々はどれも同じような針葉をして歩く者の方向感覚を鈍らせ、無いに等しい畦道は背の高い草に覆われており歩く者の足を絡め取ろうとしてくる、そんな霧深い山中をクラド達は歩く。周囲には押し殺された魔物や動物の気配が漂っているものの、五〇を超える騎士達に挑もうとはせず、ただただその行進を見過ごすばかりである。

「私はヴァーメールとの義半戦闘に際した事がほとんど無いので、話を聞く限りではクラド隊長が懸念する人物に思えないのですが」

登り気味の山道を鎧姿で歩くのは大変困難であり、自ずと歩調は遅いものとなっていく。そうするとどうしても緊張は緩んで人々は会話を始めるもので、朱雀とクラドもそれ然り過去の義半戦闘の話をしている。

「朱雀は義半戦闘が有った時に限って偶然有給を取ってたからな、最初の内は狙ってるのかと思ってたが」

「そんな先見の才が有るなら指導者にでもなってます」

「ぶっ、朱雀が指導者ねえ」

隣に並んで歩く朱雀の霧でぼやけた顔を見てクスクスと笑うクラドに「失礼な」と朱雀は不満そうに頬を膨らませて反抗した。

お互いの顔さえはつきりとは見えない深い霧の中でも彼等がもたつきながらも迷いなく歩けているのは、最初から場所を把握して先行するラバレルが居るからであった。動きやすいワンピース姿の彼女はずっと無言のまま、他の者の為に一旦足を止めるなどをして山道を突き進んでいく。

「すまんすまん、他意は有るが悪気は無い。で、話は戻るがその餓鬼とは二、三回……ああ、今思うと独立との義半戦闘は四回しかしてないからほとんどアイツが居たな。まあそいつと戦ったことは有

るんだが、っと」

クラウドは霧で隠れていた大きめの石粒に引つ掛かりそうになったが、すぐさま姿勢を持ち直して後方に歩く隊員に注意を呼びかける。「強かったんですか？」

「んー、ズバ抜けてつて程は強く無い。だけど技術は有ったな……誰かに弟子入りしているんだろ？ ないって言う剣筋だったよ」

「強くは無いのに、何故覚えてるんですか？ 何回か会ったから、という訳じゃ無いですよ」

「そうだなあ」

朱雀の言葉に、一旦間を置いて首を捻るクラウド。

『俺は、お前達の正義とやらが腐って見えるんだよ』

彼の脳裏に少年の言い放った言葉がフラッシュバックし、結果的に彼の舌打ちを招いた。

「生意気だったからか？」

「私に聞かれても……あ、霧、晴れてきましたね」

「ん」

朱雀の言葉を聞き、ようやくクラウドは先程まで濃厚に世界を支配していた霧が歩を進める度に薄くなっていくことに気付いた。

「バリ山の頂上はもうすぐです、山での戦闘は非常に難しく、独立軍の先着も視野に入れなければいけないので気を引き締めて下さい」足を止めて振り向いたラバレルが騎士達に向かって忠告をした。

いよいよか、と騎士達は自身の装備を軽く触れてみたり、鎧の着崩れを直したりと戦闘の準備をし始めた。

クラウドと朱雀も逆らう必要も無いので会話を止め、ラバレルの忠告通りに表情を険しくしていく。

無言、静寂、山鳥の鳴き声と再び歩み始めた五〇を超える足音だけが山に響き続ける事、数分。

登りだった傾斜は終わり、平坦な土地に出たのと同時に、全員の目が目的地を捉えた。

「どうやら、独立はまだ到着していないようだな」

「そうみたいです」

クラドの言葉を聞き、辺りを見渡した朱雀は頷いた。

切り開かれた平地には、山道に生えていた物と同様の草が生い茂っているが、木々は一切立っておらず、ポツポツと根本から伐採された低い切り株があるだけでとても人が身を隠せそうな場所は無い。唯一、人が隠れれそうな所は前方にある村にしては大きく街にしては小さい、平地を余す事無く横切っている——恐らく中に人では人が住んでいるであろう——歴史を感じさせる荘厳な木の門壁だけだ。

騎士達はゆつくりと周囲に警戒の目を張りながらその門へと近付いていく。

遂に門前に辿り着いた時には、全員の頭の中から待ち伏せという単語は消し去られていた。

先頭に立つラバレルは、その門に取り付けられた金属製の小さな円盤に、地面に捨てられるように置かれていた腕の長さ程の鉄の棒を数回叩き付けた。

暫くの沈黙、彼女達は私語を極力慎みながら中からの応答を待っている、ギイイ、という重苦しい音と共に門扉が徐々に開いていく。

だが、開いたのは右側だけで、それも人が通れるか通れないかという僅かな隙間だった。

「帝国騎士団の面々と御見受けしまんが、何ん用だせ？」

その隙間から、酷く訛りの強い年配の女性の声が届く。声は割と近くからするのだが、隙間からだ姿までは見えず、そこから傾きが急な特徴的な瓦屋根に古風な家々が見えるが、やはり一切の人の姿は捉える事は出来ない。

「お久しぶりです、シェイフさん」

「やっぱあ、ん主が来よったかラバレル。だんが、主が来ても渡せんもんは渡せんなあ」

ラバレルの声を聞き、少しだけ嬉しそうに声を弾ませる女性であ

つたが、やはり対応は変わらず拒否の姿勢である。

「元々は私が作ったものですよ?」

「主が作ったものでも、所詮主は半分。もう半分が許さん限りワダジ等はこれを守るよって」

「そうですか、それなら仕方ありません……とは出来ないのですが」「んなもん知らん。他国の援助も受けてないワダジ等に命令するのは廉違いじゃぎ」

頑なに渡すことを拒否する女性、何の争いも無く事を進めたいと考えているらしい

ラバレルは説得を続けるも、解決の糸口は見つからない。

「ちよつと代わってくれ」

一駒として進まない交渉に痺れを切らしたクラドがラバレルの肩を脇に避け、隙間の前に立つ。

「こんにちは、ラバレル隊長と同伴している十番隊隊長のクラド」チビイと言います」

「こんりや親切に。ワダジはシェイフドドと言いまん」

「ドドさん、?空?の危険性はご存じですか?」

「そんなうちに奉られたものだけ、効果くらいは知つとって」

「では話が早い、それが蛮族の手に渡つては世界の混乱を招きます。早々にこちらに引き渡してくれませんか」

頼み、というよりはほぼ命令に近い強い口調でクラドは隙間に言葉を差し込む。

「出来ん、例えワダジ等が殺されつとしてもこれは渡せんと。どんなせ何処いつても争いごとに使うのがやまじやて」

「そんな事にはなりませんよ」

「なら、もん一人連れてくるもんが居るじゃろ」

一向に進展しない話、クラドはとある言葉を口にした。

それが、敷き詰められた油に落ちる火種になるとも思わずに。

「そうですか、少々手荒な方法に移るしか無さそうですね。もちろん、貴方達の安全は保障しますが」

「頼んどいて正解だったかい」

門が、勢い良く轟音を山に響かせて閉じた。

そして、クラド達の後方にて叫び声上がる。

「んな!？」

急いで後方へと振り向く騎士達、しかし反応の合間にも二人、三人の悲鳴が山に木霊した。

「やっぱ、帝国が掲げる正義ってのは腐って見えて仕方ないな」

「メイト中尉、別に帝国を庇うつもりじゃありませんが正しい事は一つじゃ無いです」

突如、後方から現れた黒い影が騎士団の者を次々と斬り付け、早々と撃ち倒していく。

「独立軍だと……？ 一体何処から！ くそつ、総員戦闘態勢に移れ！ 一箇所に固まるな！」

完全に不意を突かれたクラド達は急いで平地に散らばり、武器を手取る。

「ぶひゃひゃひゃひゃ、流石わっちの弟子！ なかなか良い事言うのお」

ぼさぼさの白髪風に靡かせながら下卑た笑い声をあげるラソキララが、拳を振り上げ、振り下ろす。

それだけの事で、地震のような揺れが起こり、それだけのはずが、天を貫く勢いの火柱がそこに生まれた。

「意味ねえ行動すんじゃねえよ！」

「いやあ、何か盛り上がると思つてのお」

結果的には誰も巻き込まなかった火柱だったが、危うく当たって軍服を焼かれる所だったメイトが剣先をラソキララに向けて怒声を上げるも、彼女は楽しそうにケラケラと笑うのみ。

「相手はたった三人だ、怯まずに迎え撃て！」

クラドは声を荒げて騎士達の畏怖を取り払う。

「世界を駆け抜ける汝、その御身を万物切り裂く鎌と化せ……残念、四人ですよ？ シックルプレス」

丁度クラド達が登って来たばかりの木々生い茂る、平地の入り口に立つイオスの放った風の魔法が、騎士達の堅牢な鎧に傷を付け、露出した肌を斬り付ける。

——まさか、奴等ずっとあそこで隠れてたというのか？

「ふざけるなああああ！」

クラドは顔に血管を浮き上がらせ、武器を何も持たずにイオスへ向かって駆ける。

「おっと、うちの大切な魔術師様には手を出させないぞ？」

進行方向に横合いから滑り込んできたメイトの剣戟がクラドを襲う。

「またお前か、ストーカーなのか？」

耳障りの良い軽い金属音を響かせて剣戟を右手の手甲で受けたクラドはメイトを煽る。

どうやら普通の鉄等では無いらしく、重い一撃を喰らっても亀裂すら入らない。

「ああ？ それはそちだろ、っと！」

連続で剣を振るい立てるメイトの攻撃を手甲でいなし、クラドが顔面に向かって拳を放つも、今度は剣でガードされる。火花散る攻防、それを見てようやく騎士達は体勢を持ち直して乱戦を形成していく。

「撃つ敵が多くて楽です」

コリーは騎士達の足を狙って鉛の弾を撃ち込んでいく。騎士の中に紛れる銃士もコリー相手に応戦しようとするも、そんなに足場が広くない場所での五十を超える人間の乱戦、それも殆ど味方とあっては安易に発砲する事は出来ない。

再び轟音が周囲に轟き、今度は純粋な砂煙を巻き上げるだけであったが飛んできた岩石の嵐に巻き込まれた幾人かの騎士が意識を失って倒れていく。

そんな爆心地に、煌めく一筋の稲妻が落ちた。

「十番隊の皆さん、彼女は私が相手をしますので雑兵を任せます」

ラバレルが人差し指を蒼天に突き出して言うなり、三本、五本、十本と空中の中間から発生した稲妻がラバレルに落ちる。

その眩い閃光は戦場で戦う者の気を少なからず引き、それはメイトも同様であった。

「何回も僕と対峙してるのに、まだ力の差が分からないようだな」
「しまっ！」

一瞬だけ出来た攻防の停滞、集中を全く切らさなかったクラドの鉄拳が白刃の防御をすり抜け、メイトの腹部を深く深く抉る。

クラドの言葉に気付いた時にはもう遅く、魔力で強化された重い一撃に逆らうことは叶わず、はるか後方へとメイトは吹き飛んだ。

「ハンドガンに何を手間取っているのですか！ 近接士たちは皆魔法使いを狙って！」

「ちよっ、それは反則じゃ……！」

いつの間にか肩から何百発分ものバレットベルトを提げ、手に重々しい全自動式ガトリング銃を抱え込む朱雀が銃士の邪魔となる騎士達を払いのけ、既に逃げの大勢を取るコリーに向かってそれを乱射する。

ダダダダダダダッ、という重圧たる弾幕。

砂は舞い、地面を着弾と同時に跳ね上がらせながらステップを踏みながら逃げるコリーへと迫る。

「我をも惑わす白き君、全てを包み込み感覚を弄べ……混成……世界を駆け抜ける汝、そのその御身を万物切り裂く鎌と化せ……D・シックルミスト！」

ラバレルの魔術により一気に引つ繰り返りそうになった戦場へ、山の霧とは比べ物にならないほど濃厚な霧が発生した。イオスの魔法である。

「戦況は不利です！ 各自一旦森へと引いてください！」

「奴等を追え！ 全員三人組で森へ入れ！！」

イオスの言葉を耳にしたクラドが迅速に指示を出す。

霧で全く視界が無い平地の状態、飛び道具を持つ敵がいる以上固

まっているよりは索敵している方が良いと判断したクラウドの声に隊員達から引き締まった返事と、何発も何発も落ちる落雷が返ってきた。

指示を出したクラウドも走り、先程メイトを吹き飛ばした場所辺りを通るも彼の気配は無い。

そして全員が森へ降りて行った頃、ようやく落ち続けていた雷は止んだ。

視界の悪さを煩わしく思い、ラバレルは翼を左右に広げて地面を思い切り蹴り上げる。

濃厚な霧のドームから白線を引き、瞬間的に空へと飛翔するラバレルは上空五十メートルあたりで停止した。

「相変わらず、強度だけは良いようですね。私」

ラバレルは翼を羽ばたかせて空気を捉えながら、眼下の白へ色の無い声を落とす。

お詫び

<http://ncode.syosetu.com/n3301ba/> 交SPECu差LATION点

天上下、竜娘独占注意報の設定を上記の小説の設定の基盤にしました。

大変勝手ながら、この小説は打ち切りとなります。作者の力量不足です、申し訳ありませんでした。

ですが、上記の小説ではこの様な事が無いよう尽力を致します、どうか長い目で読んで頂けると幸いです。

一応、この作品は完結として残しておこうと思います。もしかしたら零から書き直す事も有るかもしれませんが、この失敗を忘れないためにも残しておきます。

以上を持ちましてお詫びとさせて貰います、今後とも宜しく願います（、・・・）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8872w/>

天上天下、竜娘独占注意報！

2012年1月8日20時47分発行